

2025/12

緒言

緒言

一この書はわのれが世に文章の教科書として教育的に説明せしもの  
 ぶきを熟し、平生文章上の實踐に基きて、或る生徒に教授あたりし  
 ものを増減しもてゆき、之れを讀文と作文との教科書に充てんと  
 て著はまゝものあり。

一世人はこの頃少しく文章の上に注意を喚起したれとも、二三年前  
 まては全く無頓着にてありき。この時に當りて文章といへば、和文  
 學者と漢文學者との專有物の如くにてありしあり。わのれ嘗てあ  
 る著述家に向うて文章上の注意を與へたりしことありしか、その  
 人冷淡なる一言をもて、余は文章家にあらず、といへりし。あはれ  
 文章といふものは、一の虚飾的なる贅澤物と同視せられてゆり



のれ口惜しとは思ひしかども口をつぐみぬ。世の情勢既に此の如くありしゆゑに、たとひその思想は精微にして高尚なるものありしも、文章に拙劣にしてその表彰法に無頓着なりしため、全くこれをして曖昧の地に埋没せしめたり。當時の著述文中につき細詳文の読み難くして、その意を領取するに苦むもの亦こゝに職由せり。されど世人の文章に無頓着なりしは世人の罪にあらざるあり。世文をして文章に無頓着ならしめたるは、全く文章を教授するに適當なる教科書を以て職由せざるを以て、今の文章に注意するものあれば、技術の進歩未だ十分ならざるは、亦適應なる教科書と教授法とを得ざるに由れるあるへし。

一文章を教授せんとして初學の徒に向うて、初めより全篇の文を作らしめんとするは、最も至難の事にして、又教育の順序を得たるもの

にあらざるへし。今日文海に望洋の歎を免れざるも、かゝる理由のあるものはなるへし。されば今この書は専らこれ等の弊處を救済せんとして、小より大に、單純より複雑に進ましめんと目的に出たり。即ち先づ文章上に於ける思想の區別より、思想の表彰を領取せしめ、然る後、句讀の組立より進みて、節段の組立と全篇の組立とに於ける、理論と技術とを習練せしめんとするものあり。もしこの方法によりて習練せんには、技術上の進歩と時間上の節制とに於て寸毫の裨益なきにあらざるへし。

一この書は全くかのれの創設に成れるものあり。否、作文の法格は天より降りしにもあらず。又地より出てたりしにもあらず。かのれの古今數百千年の間に於て、數百千人の脳漿より成れる、數千萬篇の文中に應用せられて、最も能く人に理解し易く、最も能く人に感動

を與へ易き法格をば撰擇し采りて、之れを科學的に組立てたるものあり。さればこの法格は決しておのれの創設に出でたるものにあらず。たゞ古來の法格を秩序的に排列しめてゆき、幾分か之れを規則的に近づかしめたるのみ、あはれ讀者よ、近來の剽竊的編述と同一の看をおすなくんば著者の大幸なり。

一この書は文例を和文と漢文とにとれり。そは和文を作らんにも、漢文を作らんにも、又和漢折衷體の普通國文を作らんにも、專らそが組立上の法則をこゝに取らしめんとしてあり。學者兩兩對照しめてかき大いに研究翫味する所あらば、普通國文の法則は更にも言はず、又漢文の法則にして和文の上に應用せらるべきもの、若くは和文の法則にして漢文の上に應用せらるべきもの、極めて多からん、讀者幸に之の心しこ。

一この書は後の讀まじき作文との實踐上より成れるものにて、自信の篤、斷乎として疑はざる所悉れども、その學の淺くその才亦拙劣にして、大方の示教を仰ぐべきもの極めて多からん。大方の諸君子よ、幸に指教を吝まるゝことなくんば、獨り余の幸のみならず、抑又文學上の大幸あり。

一この書はその文例に於ける作者の姓名は、字を書き、號を書き、名を書き、あるはその書名のみを書き、又作者の未詳なるものは失名氏と書けり。これ等はその體裁上よりいはゞ、固より一定すべきはずあれども、作者の中には名ありて號なきものあり、あるは號若くは字をもて普通に行はれたるものあり。さては之れを一定せんと固より難し。又之れを一難せんも否らざるも、組立法の理論を確むる上には寸毫たも關係する所なければ、強て之れを一定する必

言

緒

(六)

要ありと思へり。讀者幸にその心してよ。

明治二十四年中秋

幕天席地廬に在るす

筑山居士

教育 適用 文章組立法

筑山 中島幹事著



著述の目的

(一) 目的  
今の世よるついでに開けにひらけ、いや榮をふさかゆる、中よも、文化の進歩の殊に著く、殆ど駟馬に鞭てるが如し、試みに前世紀の人をしてこそ目撃せしめ、如何なる感想を起すらん。若し、かくの如くおして止むところからんは、後世紀の天地に向うて復また幾多の斬新なる現象を與へぬべし。あはき人智の靈活ある、以て天地の缺漏を修補すべく。以て造化の版圖を占奪するに足らん。

さ、が、ふ、か、く、開、け、ゆ、く、世、の、中、に、獨、り、文、章、の、道、の、み、遅、遅、と、し、て、文、化、の、進、歩、を、後、れ、た、り、こ、の、千、歳、の、遺、憾、文、學、上、の、一、大、缺、典、を、お、も、す、や、  
 それ我東洋に於ける文章を漢文にまれ、和文にまれ、著しく發達し、  
 品格もあり、趣味もあり、實に完全ある一個の形體を備へたるもの  
 て、東洋人種の精神を代表するに、最も適當にして且つ價值あるもの  
 あり。故に一片の筆端をもて、天地を動かし、一滴の墨汁をもて鬼神  
 を感せしめたる者も少らざりしあり。文章の古に發達したる此の  
 如くありしに、後世その技術を傳承して益、その極に進躋せしめんと  
 するものなきはいかに。先人がかくまで、思を凝らし技を磨きたり  
 しものも、後人に至り之れを繼續して愈、その光を發揚せんとするも  
 のなきはいかに。思うて此に至れば痛嘆の至り不堪へざるあり。  
 夫かばあれど、余は後人に向うて、いたくことを責むるとはせず。蓋先

人は多くの閑日月をもて自然的の熟練よりて自得したるものか  
 れども、後人は百忙の中に執筆して全くこの要素をかきたればあり。  
 之れに加ふるに今日、和漢文に於ける技術上發達の結果として金玉  
 の文いと多けれども、その技術に關する理法を攻究して、之れを教育  
 的、科学的、小説明したる文法書を著し、職由すれはあり。  
 和文について、語格上の規則、嚴として且密おれとも、修辭上の理論  
 は至りて少しく冷淡を失するもの、ことし。漢文の字格と語格と  
 於ては未だ粗雑を免れされとも、修辭上の理論、稍、蘊積する所なき  
 不あらず。されど漢文の修辭に關する理論は多く批評的の眼光によ  
 りて發達したるものなれば、その名詞、多くの比喩語を以て表彰せら  
 れ、又之れを説くに於ても不規則にして亂雑を著あり。かゝる有様な  
 るがゆゑ、初學の徒にして、その道に入らんとするも、門戸の閉

へさあく。たゞ、文海の濱を望み茫乎として手を束ぬるも此のみいと多かり。適、少しく文章の技術に達したる者も、如何にして之れを自得したりしか。又いかかれればこの文にこの法を用ゐたるかど問はれおぼ、一言の答辭を描くに苦しむもの多かるべし。甚しきは、文章は法ありて法をしといひ、あるは法を區區たるは真正の文にあらざれば、寧ろ法を廢せんふは如かじと、いへるものさへありとか聞さぬ。こは固より答辭に窮したる極、一時の道辭に出でたるものあるへけれとも、かゝる道辭を吐くものあるに至りしは、畢竟今日完全なる文法書を結果にして、實に文學界の失體といはざるべからず。今也文章の盛りを極めたると同時に、之に關したる著書の世に見はれたるもの汗牛充棟も當をらす。されと多くは古人の説をかきあつめたるに過ぎず、そのおごり遂ふは古書の再版にもやあらんと見

まがふばかりのものさへ見る、に至れり。稍、目新しとおぼえたるも、西洋の學説をそのまま引き来りて之れに和漢の文例を傳會したるのみ。さては文の道の秩序的に開けゆかんこと百年、河清を待たんも覺束をかるへし。今日文法書に饑渴したる時代なれば固より、その精粗を擇むに暇をしとはいへ、かくては将来文學上の結果おぼて如何なる影響を及ぼさんか、聊か憂慮をる所なきにあらざるあり。余、才拙くして識淺し、たゞ、幼より文章の道を嗜みて、和文に漢文に意を刺し力を致したれば少しく發明したる所なきにあらず、ゆゑに余はこゝにその自ら得たる所を論述して以て世の指教を仰かんとす。そは文の組立に關する理法これあり。蓋余が書生ふ文を課する際、先づ文の組立に關する理法を説くおとの必要を感じ、多年和文と漢文とについて、その組立上に應用せられたる法則を、成るべく秩

序を追ひ順序を正しくし、科學的に説明せんと考へ得たるまに、  
 るしつるが、やゝつもりて、やがてこの一篇とはおれり。されと余の  
 非才なるをも顧みず、大家先輩も未だ着手せられさりしものを希圖  
 せることなれば。或は此の山を負いんとし、螳螂の車に當るらんとま  
 との喰をや招がん。その力を量らまとの譏をやもとむらん。さりなが  
 ら説のいたらぬはさておき、その稍、理法に近きところありて、作文  
 と讀文との上ふ多くの時間と多くの勞苦とを省かれはた少しく文  
 章の道に益する所あらは望外の幸にあん。あはき世の博學多識の士  
 説の至らぬ所は飽くまで之れを修補し、又その誤謬を正し、その非理  
 を改め、以て正ふ就かしめてよ。さらば後世完全なる文法書を作らん  
 とするもの、參照の一端ともありなんか。あれ著者の願あり。又此書  
 の目的あり。豈敢て文學上の欽典を修補したりといはんや。

上篇 思想

第一章 文章と思想との關係

文章と思想とは、その品質上、互に契合したるものなるを要す。更に  
 覆説され、文章の品質は思想の品質に適應したるものを撰擇せさ  
 るへからず。さらすは讀者をして文章の中を表彰せられたる思想を  
 正確に感取せしむる能はず。否、讀者に向うて主要の思想を感取せ  
 しむる能はさるのみならず、却りて餘想外なる感情を引き起さしめ、  
 到底文章の目的を達する能はさるへし。よ、に至誠至情の發露よ  
 りて組立てられたる思想を表彰せんとする時、修飾的の筆を弄し、徒  
 らよ字に彫り句に繡する文章を用ゐなは、いかゞ、至誠至情の思想は  
 全く虚飾的文章の爲めに打消され、讀者はた、文章の偉麗のみ眩  
 倒せられて、その至誠至情の思想の何れよあるかを發見する能はさ



るへし。さればかゝる思想を表彰せんは、之れも適應したる平易淡  
 泊なる文體を用ゐること賢かその熱情の真を直寫するに最も適當を  
 へけれ。余嘗て惡漢無頼の死狀を寫したる文の中に、玉の緒まさふ  
 絶えかんとする云云とあるを見たりき。抑、玉の緒云云ある文字は高  
 尚にして優美なるものなればかよわき美人、あるは精忠無二の義人  
 かどのさまを寫すからばこそ適當ならめど、天地も容れざる惡徒の  
 狀につきこそ黜出したるの不倫亦甚しといふへし。さるゆゑに、上乗  
 力を極めて惡奸の狀を寫し出し、ものもために、全く無効の表彰と  
 はなれり。至感のことならずや。これ文章の思想の品性に適合したる  
 ものを撰擇せざるへからすといへりし所以なりとす。  
 又文章と思想との發達の上に於ても、相互の契合あるを要す。何とな  
 れは、文章と思想とその品性を同くする以上の思想の發達と共に

の文章も發達し、而して文章の發達と共にその思想も亦た發達する  
 ものなれりなり。蓋感情的の思想發達したりし邦土には、隨て感情的  
 の文體大いに發達し、精密の思想發達したりし邦土には、又隨て精密  
 の文體大いに發達したるは歴史上の事實に照らして争ふべからざる  
 あり。されば文章表彰上の目的より見るも、又文章發達上の結果より  
 見るも、文章と思想とは互にその品性を契合せしめて、須臾も相離る  
 へからざるものなることは明瞭なり。  
 されとも文章を作為せんとする時には、文章と思想との間に嚴重か  
 ら一境界を劃して、互に之れを混同すべからず。更に覆説すれば、思  
 想上に於ける資料の撰定と、文章上に於ける表彰の工夫とを同時同  
 處に爲すべからすといふふあり。おのれ世人の文章を作為するさ  
 まを見るに、文題を得て、直ふ且つ筆し且つ思ふもの多かり、かく

て、思想の撰定上のみ工夫するかゆゑ、文章表彰上の工夫に冷淡とありて、到底思想と文章との雙絶あるものを得むこと能はざるべし。されば思想の資料を撰定するは、他の方法をもて、又他の時間をもて、枕上之れを思考せんも可あり、厠上之れを思考せんも可あり、途上之れを思考せんも亦可あり。かくしてその思想の資料を撰定したる後、専らおのが心思を文章表彰の上に凝らして一氣に作り了るを要す。

されとも文章と思想とについて十分なる工夫を凝らして作爲したるものと雖も、場合によりて、その文章と思想と何れか優劣したるものかきにあらず。況して一方の工夫のみ偏したるものに於てをや。今之れを下に説明せむ。

### 第一節 文章の思想に勝てるもの

文章の思想に勝てるものとは、十分の工夫を凝らすも十分の思想を得ざる、あるは未だ初めより十分の工夫を用ゐざるに、たゞ文章の表彰のみ工夫して修飾的に字句を艶麗にし華美にしたるものをいふ。

そも文章の終始、思想に隸屬せしめてその指揮を受けしめざるへからざる者あるべき、これを轉倒して思想を文章の下に隸屬せしめ、修飾的の文字をもて思想を束縛したるか如きは、真正の文章といふへからず。今和文と漢文とにつき左に一二の例を示さんとす。

#### 大堰川行幸和歌序

紀 貫 之

あはれ、我君の御代長月の九日ときのふいひて、残れる菊を惜み給ひ。又くれぬへき秋を惜み給ひむとて、月の桂のこゑた、春の梅津より、御船よそひて渡守をぬして、夕月夜小倉の山のほと

り、行く水の、大堰川、行幸し給へれば、久方の、そらに、いたち、びける雲も、かくみゆきを、まぢ、流るゝ水、底ふり、濁れる塵を、く、御心に、ぞ協へると、詔して、仰せ給ふ事、秋の水に、浮びては、流るゝ、木の葉と、あやまたれ、秋の山を見れば、織る人、あき、錦とおもほえ、紅葉のは、の嵐に、ちりて、曇らぬ雨、ときこえ、菊の花の、岸、ふ残れるを、空、かゝる星と、驚き、霜の、鶴、河邊、ふ立ちて、雲の、下るか、と疑はれ、夕べの、さる、山のか、ひ、鳴きて、人の、涙を、おとし、旅の、雁、雲路を、まどひて、玉章と、みえ、游ふ、かも、め水に、すみて、人、なれたり、入江の、松、幾世、経ぬらむと、いふ、まとを、ぞよませ給ふ、我等、短き心の、この、もか、の、もに、まどひ、つた、かき、言の、葉、吹く、風、の、空に、みだれつゝ、草の、葉の、露と、共に、うれしき、涙、おち、岩、浪と、共に、悦ばしき、心、ぞ、たち、かへる、若し、この、言の、葉、世の、末、まで、残り、

今をむかしにくらべて、後の今日をさかむ人、海士の、拷繩、くりかへし、志のぶの、草の、忍ば、ざら、めや、

按するにこの全文、形容巧みに過きて、その姿の艶麗なるは二月の花ふも勝れり。されど、思想の活動乏しき、白璧の微瑕とやいはむ。これ文章の思想に勝てる例證をるへし。

聖主得賢臣頌

王

褒

夫、荷、旃、被、毳、者、難、與、道、純、綿、之、麗、密、羹、藪、含、糗、者、不、足、與、論、太、宰、之、滋、味、今、臣、僻、在、西、蜀、生、於、窮、巷、之、中、長、於、蓬、茨、之、下、無、有、游、觀、廣、覽、之、知、顧、有、至、愚、極、陋、之、累、不、足、以、塞、厚、望、應、明、旨、雖、然、敢、不、略、陳、愚、心、而、抒、情、素、記、曰、恭、惟、春、秋、法、五、始、之、要、在、乎、審、己、正、統、而、已、夫、賢、者、國、家、之、器、用、也、所、任

賢則趨舍省而功施普。器用利則用力少而就效。衆故工人之用鈍器也。勞筋苦骨終日矻矻。及至巧冶鑄千將之璞。清水淬其鋒。越砥斂其鏘。水斷蛟龍。陸割犀革。忽若籊。汜畫塗。如此則使離婁。晉繩公輸。削墨雖崇臺五層。延袤百丈。而不溷者。工用相得也。庸人之御駑馬。亦傷吻弊策。而不進於行。胸喘膚汗。人極馬倦。及至駕齧膝膠。乘且王良。執靶韓哀。附輿縱騁。馳驚忽如影靡。過都越國。蹶如歷塊。追奔電逐。遺風周流。八極萬里一息。何其遼哉。人馬相得也。故服締絃之涼者。不苦盛暑之鬱。煥。襲狐貉之煖者。不憂至寒之悽愴。何則。有其具者。易其備。賢人君子。亦聖王之所以易海內也。

是以嘔喻受之。開寬裕之路。以延天下之英俊也。夫竭智附賢者。必建仁策。索人求士者。必樹伯迹。昔周公躬吐握之勞。故有圖空之隆。齊桓設庭燎之禮。故有匡合之功。由此觀之。君人者。勤於求賢。而逸於得人。人臣亦然。昔賢者之未遭過也。圖事揆策。則君不用其謀。陳見悃誠。則上不察其信。進仕不得施效。斥逐又非其愆。是故伊尹勤於鼎俎。太公困於鼓刀。百里自鬻。甯子飯牛。離此患也。及其遇明君。遭聖主也。運籌合上意。諫諍則見聽。進退得闢其忠。任職得行其術。去卑辱與滌。而升本朝。離蔬糲。躋而享膏梁。剖符錫壤。而光祖考。傳之子孫。以資說士。故世必有聖智之君。而後有賢明。

之臣虎、鷲而谷風、冽龍興而致雲氣、蟋蟀、侯秋吟、  
 蜉蝣出以陰、易曰、飛龍在天、利見大人。詩曰、思皇  
 多士、生此王國。故世平主聖、俊又將自至、若堯舜  
 禹湯文武之君、獲稷契皋陶伊尹呂望之臣、明明  
 在朝、穆穆列布、聚精會神、相得益章、雖伯牙操、籟  
 鐘、蓬門子、擊、烏號、猶未足以喻其意也。故聖主必  
 待賢臣、而弘功業、俊士亦俟明主、以顯其德。上下  
 俱欲、懽然交欣、千載一會、論說無疑、翼乎如鴻毛  
 遇順風、沛乎若巨魚、縱大壑、其得意如此、則胡禁  
 不止、曷令不行。化溢四表、橫被無窮、遐夷貢獻、萬  
 祥必臻、是以聖主不徧窺望、而視已明、不殫傾耳、  
 而聽已聰、思從祥風、翱德與和氣游、太平之責塞、

漫游之望得、遊自然之勢、恬淡無爲之場、休徵  
 自至、壽考無疆、雍容垂拱、永永萬年、何必偃仰詘  
 信若彭祖、煦噓呼吸如喬松、眇然絕俗、離世哉。詩  
 曰、濟濟多士、文王以寧。蓋信乎、其以寧也。」

按するにこも力を極めて字に刻み句を繙し、絢爛目を奪はん  
 とする奇觀あきにあらねども。その思想の上に勢力を欲きて、  
 讀者に十分の感動を與へざるいといとくちをし。

第二節 思想の文章に勝てるもの

思想の文章に勝てるものとは、十分ある思想を撰定して、その思想が  
 胸中に充ち満ちて文章の上に溢れ出でたるものをいふ。更に覆説す  
 れり、思想の勢力最も強烈にして、文章の表彰を左右すへきものこれ  
 かり。思想既に完全ある者を撰定したる以上は、これを文章の上に表

華せんにも自然に巧妙あるを得へし。そは思想の既に確定せられたるものあらんには、その表彰の方法の幾回となく鍛錬の功を積みてその極處に達せしむることを得なければあり。

且思想の勢力の文章に勝つものならんには、思想の勢力をもて自己の品性も適合すべき文章を取捨することを得へきものなりとす。例へは思想の金錢にて、文章の物品の如し。金錢の銅貨あり、銀貨あり、あるの金貨あり。而して思想も、野卑なるもの、淡薄なるもの、あるの高尚にして且深奥なるものあり。若し十分の金錢、即ち思想を得たる以上からんに物品ある文章を取捨せんこと固より思ふ所のまゝあるへし。かゝれば真正の文章を作爲せんには、豫め思想上の撰定せんことこそその最も緊要なるへけれ。以上説く所によりて、和文と漢文とにつき一二の例を示さんとす。

伊勢物語一章

夫名氏

昔水無瀬に通ひ給ひし惟喬の親王、例の狩去にかはします。御供に馬頭なる翁仕う奉れり。日頃經て、宮に歸り給ひけり。御おくりして疾くいさんと思ふに、大御酒給ひ、祿給はんとて遣さるりけり。この馬頭心もとあがりて、

枕として草ひさむすぶこともせどあきの夜とにたのまれか  
くに

とよみける。時は三月の晦日ありけり。親王大殿籠らで明し給ひてけり。かくしつゝまうで仕う奉りけるを思ひの外に、御ぐしおろさせ給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。正月に拜み奉らんとて、小野に詣でたるに、比叡の山の麓おれ、雪いと高し。強ひて、御室に詣て、拜み奉るに、徒然といと物悲しくおらしまし

け。れ。ば。や。久。し。く。侍。ひ。て。古。の。事。な。ど。思。ひ。出。で。聞。え。さ。せ。け。り。  
さ。て。も。侍。ひ。て。し。が。お。と。思。へ。ど。公。事。ど。も。あ。り。け。れ。ば。得。侍。は。で。夕  
暮。に。歸。る。と。て。

わ。す。れ。て。は。夢。か。と。お。も。ふ。ね。も。ひ。き。や。雪。ふ。み。わ。け。て。君。を。見。ん  
と。は

と。て。か。ん。お。く。く。来。に。け。る。

按。す。る。に。こ。は。勢。語。中。の。歴。卷。か。る。へ。し。淡。淡。た。る。文。字。中。に。悲  
哀。の。至。情。を。寫。出。し。ぬ。讀。者。を。し。て。雙。眼。に。涙。の。流。出。す。る。を。覺  
え。さ。ら。し。む。こ。れ。文。の。至。れ。る。も。の。お。ら。す。や。

前出師表

諸葛亮

臣。亮。言。先。帝。創。業。未。半。而。中。道。崩。殞。今。天。下。三。分。  
益。州。疲。敝。此。誠。危。急。存。亡。之。秋。也。然。侍。衛。之。臣。不

懈。於。内。忠。志。之。士。忘。身。於。外。者。蓋。追。先。帝。之。殊。遇。  
欲。報。之。於。陛。下。也。誠。宜。開。張。聖。聽。以。光。先。帝。遺。德。  
恢。弘。志。士。之。氣。不。宜。妄。自。菲。薄。引。喻。失。義。以。塞。忠  
諫。之。路。也。官。中。府。中。俱。為。一。體。陟。罰。臧。否。不。宜。異  
同。若。有。作。姦。犯。科。及。為。忠。善。者。宜。付。有。司。論。其。刑  
賞。以。昭。陛。下。平。明。之。治。不。宜。偏。私。使。內。外。異。法。也。  
侍。中。侍。郎。郭。攸。之。費。禕。董。允。等。此。皆。良。實。志。慮。忠  
純。是。以。先。帝。簡。拔。以。遣。陛。下。愚。以。為。官。中。之。事。事  
無。大。小。悉。以。咨。之。然。後。施。行。必。能。裨。補。闕。漏。有。所  
廣。益。將。軍。向。寵。性。行。淑。均。曉。暢。軍。事。試。用。於。昔。日。  
先。帝。稱。之。曰。能。是。以。衆。議。舉。寵。以。為。督。愚。以。為。營。  
中。之。事。事。無。大。小。悉。以。咨。之。必。能。使。行。陣。和。穆。優。

劣得所也。親賢臣，遠小人。此先漢所以興隆也。親小人，遠賢臣，此後漢所以傾頽也。先帝在時，每與臣論此事，未嘗不歎息痛恨於桓靈也。侍中尚書長史參軍，此悉貞亮死節之臣也。願陛下親之信之，則漢室之隆，可計日而待也。臣本布衣，躬耕南陽，苟全性命於亂世，不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙，猥自枉屈，三顧臣於草廬之中，諮臣以當世之事。由是感激，遂許先帝，以驅馳。後值傾覆，受任於敗軍之際，奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹慎，故臨崩寄臣以大事也。受命以來，夙夜憂慮，恐付託不效，以傷先帝之明。故五月渡瀘，深入不毛。今南方已定，甲兵已足，當獎帥

三軍北定中原。庶竭駑鈍，攘除姦凶。興復漢室，還於舊都。此臣所以報先帝而忠陛下之職分也。至於斟酌損益，進盡忠言，則攸之禕允之任也。願陛下託臣以討賊興復之效，不效則治臣之罪，以告先帝之靈。若無興德之言，則責攸之禕允等之咎，以彰其慢。陛下亦宜自謀，以諮諏善道，察納雅言，深追先帝遺詔，臣不勝受恩感激。今當速離臨表，涕泣，不知所云。」

按するに忠精の氣、中に充ち満ちて、遂に文字の外に溢れたり。こを讀みて泣かざるものやはある。こを讀みて悲まざるものやはある。こを誦して忠精の心を起さざるものは人中の羽毛とやいはん。



第二章 思想の區別

文章組立上より思想の大意を區別して左の四種とす

第一、性質上の區別

理想  
情想  
意想

第二、形體上の區別

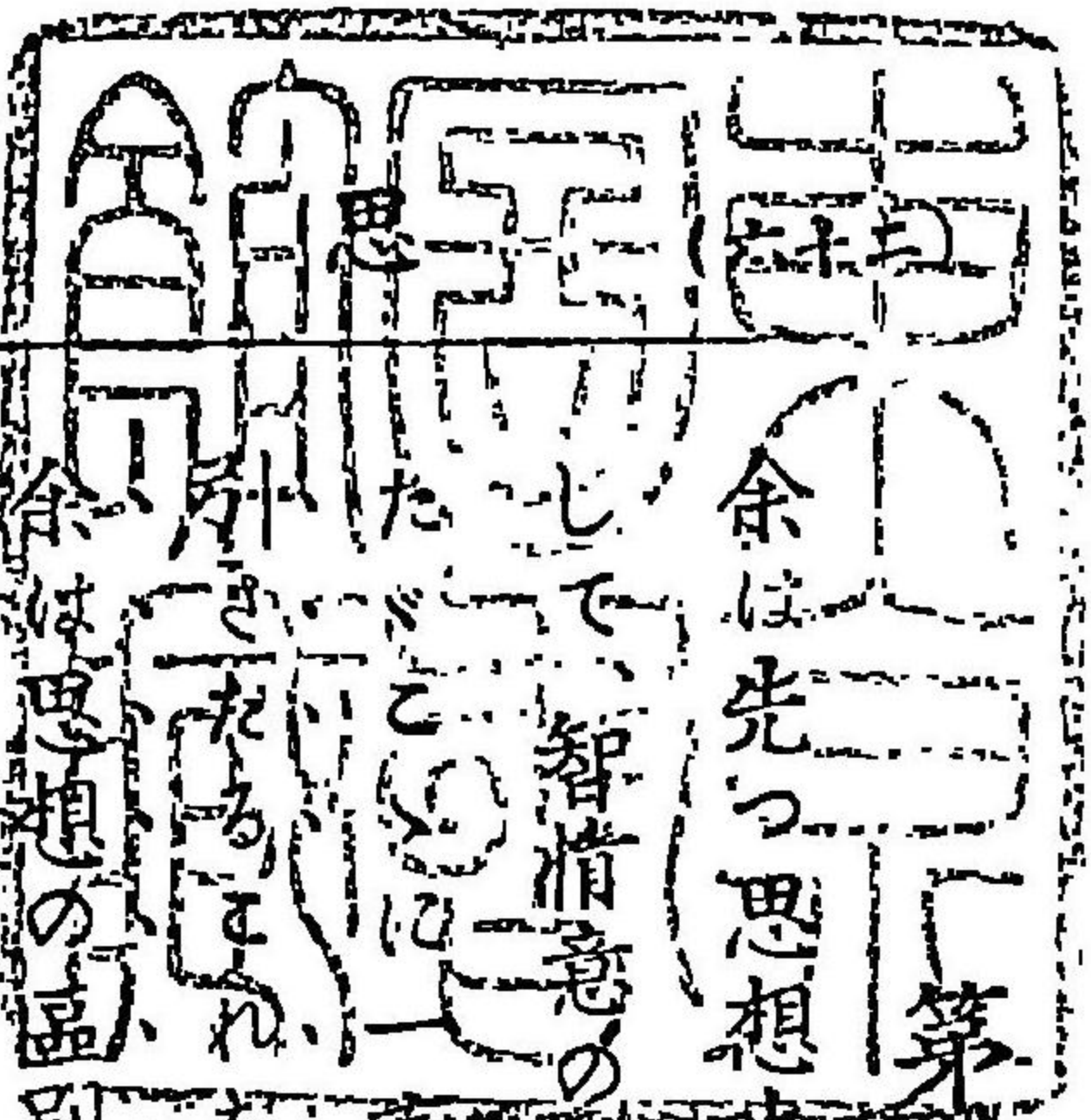
虚想  
實想

第三、分量上の區別

汎想  
特想

第四、關係上の區別

主想  
客想



第一節 性質上の區別

余は先づ思想上の性質を區別せんとするに臨み心理上の理法を應用して、智情意の三種に分つことの必要を感じたり。

言すべきは、思想上の區別について、一、文章の實例を、  
分るべきは、文章と思想とはその間に判然たる境界ありとも、  
余は思想の區別をして一層明瞭ならしめんか爲めに、こを引き出て  
たるふれば、讀者その心してよ。

第一理想

理想とは凡て知る事に直接に關係して働らく所の心狀をいふ。更に  
覆説すれば、辨異、統同の理法に基きたる智力的の作用これあり。今之  
れを區分すれば、

(一) 觀察

想

- (二) 追憶
- (三) 假設
- (四) 推理

の四種とす。

余は學理上、説明の便を計りてかく判然たる區別をなしたれとも、その實際上、心意の發動するに至りては、この四種互に相連絡混交して、分割すべからざるものありとす。されはこはたゞその主動の顯著なるものを主として、區別したるものと知るへし。

(一) 觀察……とは、五官の感觸を以て現在に於ける萬有の實在を觀察し、認識するものをいふ。記事、叙事、若くは遊記文の如き多くはこれに属す。

濱松中納言物語

失名氏

更に畫の文、珍しうねほされければ、一の大位の御許に、忍びて立ち寄り給へり。深き夜の月、浮雲だにたかひかず澄めるに、遠に廣き池の中島に作りかけたる樓臺に、三四五の君、琴ども揃き合せて、月を詠むるほどかり。やがてこなたにとて入れ奉れば、中島の汀より横はりたひ出で、樓臺の上にさし覆ひたる紅葉の、さても誠に夜の錦かと思えたるに、御簾卷さあげて、几帳ばかりをうちおろして入れ奉れり。常はいかゝあらん、おもしろき池の上、紅葉の影にて、いと麗しくさうぞき、髪あげて居たる、月かげともいづれともなく、繪に書きたるやうなり。三の君、琴、四の君、箏の琴、五の君、琵琶、揃き合せたる聲聲、いづれとなくおもろし。琴はかうやうくゑんの御琴の音にあらぶへきことならねど、折からなればにや、をかしく聞ゆ。箏の琴もかもしろき中

に、琵琶はいみじう優れて聞ゆれば、親のからびなくわきて悲しかるも、道理にこそとねぼす。男君もこの音に合せ給ふて笛を吹き給ひつゝ、別を惜み給ふに、哀も悲しさも、取り集めたる心地するに、やうく明ければ、

日の本の、山より出てん、月見ても、

まつぞこよひは、こひしかるへき、(上下 節略)

畫記

韓退之

雜古今人物小畫、共一卷。騎而立者五人。騎而被甲載兵、且下牽者十人。騎而負者二人。騎執器者二人。騎擁田尖者一人。騎而牽者二人。騎而驅者三人。執羈勒立者二人。騎而下、倚馬臂隼而立者

一人。騎而驅涉者二人。徒而驅牧者二人。坐而指使者一人。甲冑手弓矢鉄鉞植者七人。甲冑執幟植者十人。負者七人。偃寝休者二人。甲冑坐睡者一人。方涉者一人。坐而脫足者一人。寒附火者一人。雜執器物役者八人。奉壺矢者一人。舍而具食者十有一人。挹且注者四人。牛牽者二人。驢驅者四人。一人杖而負者。婦人以孺子載而可見者六人。載而上下者三人。孺子戲者九人。凡人之事三十有二。爲人大小百二十有三。而莫有同者。馬大者九匹。於馬之中。又有上者。下者。行者。牽者。涉者。陸者。翹者。顧者。鳴者。寢者。訛者。立者。人立者。戲者。飲者。洩者。陟者。降者。痒摩樹者。噬者。喜相戲者。

怒相踉蹌者。秣者。騎者。驟者。走者。載服物者。載狐兔者。凡馬之事二十有七。爲馬大小八十有二。而莫有同者。馬牛大小十一頭。索駝三頭。驢如索駝之數。而加其一。馬一。犬羊狐兔麋鹿共三十。旃車三兩。雜兵器。弓矢。旌旗。刀劍。矛楯。弓服。矢房。甲冑之屬。銚盃。筮笠。筐筥。銚釜。飲食服用之器。壺矢。博奕之具。二百五十有一。皆曲極其妙。(以下節略)

(二) 追憶……とはすべて過去に於ける事實を再ひかのが心意上に喚起して、之れを追憶するものをいふ。歴史若くは沿革史等の文之れに屬す。遊歴中土地との關係より歴史的の事實を追憶したる文の如き亦然り。されど古を憑吊したる文には多少感慨の意を注入したるものあれば、この追憶といへる中には感情的の思想を交へたるもの多か

るべし。

義經頼朝に謁見のこと 盛衰記 失名氏

源氏は猶浮島が原に陣を取りて御座おはしける。こゝに齡二十餘、色白く勢せい小劣の頼魂つら眼居まごころ指過て見えけるに、郎等らうどう廿餘騎を相具して陣前に出来て名乗りけるは、(以上)是は故左馬頭殿(現在)子息九郎曹子常盤が腹に牛若と申侍りしが、後には遮那王とて京の北山鞍馬寺に在りしかども、世の中住詫びて興州に落下りて男にあり、九郎冠者義經と申す者にて侍るが、(以上)佐殿一院の御詫を蒙らせ給ひて平家追討の披露あるによつて、一門の我執を存じ御力をつけ奉らん爲に、夜を日に繼で馳參して候。申入れさせ給へと宣ひければ、兵衛佐間敢へす涙を流し請じ入れ給ひて、如何にやいかに、然る事候らはん。頼朝勅勘を蒙りし身おれば音信叶ひ難く

候ひき。平家追討の院宣を下し給ふて後は他事をく其の管の間、訖と思ひよらざりつるに、間敢へす御渡り嬉しとは事も疎に侍り。昔八幡殿の後三年合戦の時、弟に兵衛尉義綱は、折節帝王に仕へ候ひけるが、兄の向後の覺束ふさに御暇を給ひて、罷り下るべきよし奏聞しけれども、御免をかりければ、陣家に絃袋を懸け逃下りて金澤の館へ参向したりければ、八幡殿殊に悦び給ひて、故頼義朝臣のおはしたるごとこそ覺れれとて涙を流し給ひけり。(昔八幡殿云々よりこゝれまてを退憶とす)唯今御邊の御渡り例少しも違はず、故左馬頭殿とこそ見奉り候へとて、(以上現在)互に袖を絞り給へば、大名も小名も皆鎧の袖を沾しけり。(以上現在)  
(上下節略)

悲寧樂故京辨一作歌一首並短歌 大伴家持

八隅知し、吾大君の、たかしかす、やまとの國は、かみろきの、神

の御代より、まきませる國にしあれば、あれまさん、皇子のつぎ  
 つぎ、天の下、あらしまさんと、八百萬、千年をかねて、定めけん、  
 平城の京師は、かざろひの、はるにしあれば、春日山、三笠の野邊  
 に、櫻花、このくれがくり、かほ鳥は、まふくまば鳴き、露霜の、秋  
 さりくれば、いこま山、とぶひがをかに、萩のえを、あがらみちら  
 し、さをしかは、つまよひとよめ山みれば、やまもみかほし、里み  
 れば、さともすみよし、ものゝふの、やそとものをの、うちはへて、  
 さとちみまけは、天地の、よりあひのきはみ、萬世に、榮えゆかん  
 と、おもひにし、おほみやすらを、たのめかし、平城の京師を、あ  
 たらよの、ことにしあれば、太君の、ひさのまに、く、春花の、う  
 つろひかはり、群鳥のあさたちゆけば、さすたけの、大官人の、ふ  
 みならし、かよひしみちは、馬もゆかす、人もゆかねば、荒れにけ  
 るかも

たちかはり、古さみやこと、なりぬれば、

みちのあたくさ、長く生ひにけり、

なつきにし、平城のみやこの、荒れゆけば、

いてたつことに、歎しまさる、』

越中懷古

李白

越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、  
 春殿(過去を)只今只有鷓鴣飛(現在を)、  
 宮女如花滿

前赤壁賦

蘇東坡

月明星稀、烏鵲南飛、此非曹孟德之詩乎、  
 西望夏口、東望武昌、山川相繆、鬱乎蒼蒼、  
 此非孟德之困於周郎者乎、  
(以上現在より過去に入る)  
 方其破荊州、下江陵、順流

而東也。舳舻千里。旌旗蔽空。醜酒臨江。橫槊賦詩。固一世之雄也。而今安在哉。(以上過去より現在に入る。上下節略)

阿房宮賦

杜牧之

六王畢。四海一。蜀山兀。阿房出。覆壓三百餘里。隔離天日。驪山北構而西折。直走咸陽。二川溶溶。流入宮牆。五步一樓。十步一閣。廊腰縵迴。簷牙高啄。各抱地勢。鉤心鬥角。盤盤焉。囷囷焉。蜂房水渦。矗不知其幾千萬落。長橋卧波。未雲何龍。複道行空。不霽何虹。高低冥迷。不知西東。歌臺煖響。春光融融。舞殿冷袖。風雨凄凄。一日之內。一宮之間。而氣候不齊。妃嬪媵牆。王子皇孫。辭樓下殿。輦米於秦。朝歌夜絃。為秦宮人。明星熒熒。開粧鏡也。綠雲擾

擾梳曉髮也。渭流漲膩。棄脂水也。煙斜霧橫。焚椒蘭也。雷霆乍驚。宮車過也。鞭轆遠聽。杳不知其所之也。一肌一容。盡態極妍。縵立遠視。而望幸焉。有不得見者。三十六年。燕趙之收藏。韓魏之經營。齊楚之精英。幾世幾年。取掠其人。倚疊如山。一旦有不能輸。米其間。鼎鑊。玉石。金塊。珠砾。棄擲。遷延。秦人視之。亦不甚惜。(以上過去を追憶す。以下の二段。追憶と交ふる。推理を以てす。)嗟呼一人之心。千萬人之心也。秦愛紛奢。人亦念其家。奈何取之盡鎔銖。用之如泥沙。使負棟之柱。多于南畝之農夫。架梁之椽。多于機上之工女。釘頭磷磷。多于在庾之粟粒。瓦縫參差。多于周身之帛縷。直欄橫檻。多于於九土之城郭。管絃區亞。多于市人之言語。

使天下之人不敢言而敢怒。獨夫之心日益驕固。成卒叫、函谷舉、楚人一炬、可憐焦土。嗚呼、滅六國者、六國也、非秦也。族秦者、秦也、非天下也。嗟夫、使六國各愛其人、則足以拒秦。秦復愛六國之人、則遞三世可至萬世而為君。誰得而族滅也。秦人不暇自哀、而後人哀之。後人哀之、而不鑒之、亦使後人而復哀後人也。」

(三) 假設……とは、從來自ら經歷したる事實、若くは自ら認識したる事實に基きて假設的に一個の事實を構造したるものをいふ。佛氏か地獄極樂等に關したる文、若くは仙人の仙躰に關したる文、あるは寓言を以て人を戒むる文、又未來に關する事實を想像するもの多くはこれに屬す。或人か辭世の句に「地獄にも木蔭かあるか夏の暮」といひ

しもこの想像に關したるものなるべし。

己を去らす 古今著聞集

橘 成 季

園の榆の木の上に蟬の露を飲まんとするあり。後に蟬のをかさんとするを去らす。蟬また蟬をのみ守りて、後に黄雀のをかさんとするを去らす。黄雀また蟬をのみ守りて、榆の木の下に弓を引きて童子のをかさんとするを去らす。童子黄雀をのみ守りて、前に深谷、後に掘株のあることを去らすして、身を過てり。  
(上下節略)

桃太郎 童話長編

黒澤 翁 満

人習ふ、人の世にして、神ならふ、神代に近き、古への語りごとも、こをば、今に傳へて、いちじろく。いち柴かると、足引の、山路に翁は、出立し、姫は川に、たへのほの、衣を洗ふ、上つ、瀬ゆ、いづて



の舟の梶のとのつぶらつぶらと、きにづらふ桃一つをも漂ひて、  
 流れしよるを拾つ。今猶ひとつよりこなん、翁にもおも、と  
 いへば、又つぶらくと、流れよるを共に拾て、歸りきて。翁も  
 食んと、やしほをりの、ひも刀もて、其の桃を、わりて見たれば。  
 さき草の、中に怪しき、みめづ子の、入てしあるを、手にすゑて、  
 うつくしみつ、玉ちはふ、神つみまると、つるき太刀、名を命せ  
 もて、天傳ふひたしうらがし。『荒玉の、年もへなくに、くはしほこ  
 千引の岩も、掌末に、捧ぐばかりの、手力の、猛士と爲りて、曰へ  
 らくは。常世の國の、根の國の、よもつ國に、い渡りて、鬼のもたる、  
 賢をむ、取てこましを。粟つきかて、黍つきかて、賜らんと、ま  
 かりまをして。いそのかみふるやをとこの銀の、貫目の太刀の、  
 組の緒を、とりしてつ、飛鳥のあすか男のぬば玉の黒沓さしは

き、粟きみを、腰にかきつけ、むらきもの、心ふとくも、かしのみの  
 一人出たち、足引の、山こえ野こえ、里越えて。いゆくまに、く、里  
 よりは、犬まろ出、山よりは、猿丸いで、野つ鳥雉も出て、ちはや  
 ぶる神つみまろの、よくごい、いづちいゆかす、腰には、何か佩せ  
 る、かこじ物一つ賜りて、あともはれ、いづちも行んと、なく兒な  
 す慕ひ来ぬれば。我はもや、よもつ國の、鬼のたから、取にぞいゆ  
 く、腰なるは、大やしま國に、名がはしき、粟の團子、きみの團子、  
 一つないひ、三粟のなかば分ちて、與へんと終に率ゐて、百たらす  
 八十島がくり、天地の、そきへの國の、岩たむ、鬼のむろやに、  
 たなべていゆき到れば。平坂に、五百引岩を、ひきさへて、よも  
 つ軍を、起しつ、あたみ挑むを、太刀かきし、ほこゆけやさし  
 をたけびて、暴風の、草葉吹くごとく、鬼のことく、拂ひむけ、

たひらげぬれむ。犬は物ひぎ折り伏せて、うづらなすいほり匍匐をろか拜み、命は、なとり玉ひそ。此國の、寶のきはみ、まつらんと仰ふさこひのみ、つき榊いつきまつるを、い取りきて、翁に、堰に、稻城と、金の庫くらまきもあふ家づとにすと、まゝくしろよみの國中に、うしはける。『鬼のもたる寶は、かくりみの、かくり笠、うち出の、榊と、ゆらゆらに、とりゆらかせむ、まき柱、ふとしき立てる、はしだての庫も、いなごも、庭中に、なり出にけり、くれはとりあやに、奇異、鬼のたからも。』

いざなぎの、神の御世にも、かんつみを、

よもついくきは、おひやらひける。』

道遙遊

註

子

北冥有魚、其名爲鯢。鯢之大、不知其幾千里也。化

而爲鳥、其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。(以下節略)

潮州韓文公廟碑 錄歌

蘇東坡

公昔騎龍白雲鄉。手扶雲漢分天章。天孫爲織雲錦裳。飄然乘風來帝旁。(以上、韓公の白雲鄉、天孫の傍、侍居り、時は、錦裳を織りて、能別を、自ら天の文章を作れり。又人間界ふ下らんとす。)下與濁世掃秕糠。西遊咸池略(以上、韓公の人間界、祝融先驅、海若、扶桑、草木衣被、昭回光。追逐李杜、參翺翔。汗流籍湜、走且僵。滅没倒景、不得望。作書詆佛、譏君王。要觀南海、窺衡湘。歷舜九嶷、吊英皇。祝融先驅、海若藏。約東鮫、纏如驅羊。)以上、韓公の人間界、釣天無人、帝悲傷。謳吟下招遣、巫陽。(以上、韓公、天帝の召に應じて、再び、天上へ昇りしをいふ。これ假設。)曝牲鷄卜羞我觴。於餐荔丹與蕉黃。公不少留我滄滂。翻

然被髮下大荒。

(四) 推理……とは、原因結果の關係より事物自然の定則を推斷するものをいふ。百科の學理を記述したる文、古今の人物を評論したる文、若くは批評的文、多くはこれに屬す。

徒然草

吉田無好

萬の事いたのむへからず。愚ある人のふかく物を頼むゆゑふ、うらみいゝる事あり。『いさほひありとて頼むへらるる、時の間、失ひ易し。才ありとて頼むへからず。孔子も時よあらず。徳ありとて頼むへからず。顔回も不幸ありき。君の寵をも頼むへからず。誅をうぐることもみやかあり。奴またかへりとして頼むへからず。とむきはしる事あり。人のこころざしをも頼むへからず。かからず變ず。約をも頼むへからず。信あることすくおし。身をも人を

もたのまされば、是ある時、非ある時、うらみず。左右ひろけれを、きはらず。前後とほけれを、ふきからず。せはき時は、ひじけくたく。心を用ゐる事、こしきふじて、まびしきとまは、物ふさかひあらそひてやぶる。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せむ。』人は天地の靈あり、天地はかきるところあり。人の性、なんぞことあらん。寛大ふしてきはまらざる時、喜怒是よきはらずして、物のためよわづらはず。』

土佐日記

紀貫之

二十日 昨日のやうなれば、船もいだし、皆人々憂へ歎く。苦しく心もとあければ、唯日の經ぬる數を、今日いくか、二十日三十日と數ふれば、指もそこをはれぬべし。夜は、いも寝ず、いとわびし。二十日の夜の月出てよけり。山の端もあけて、海の中よりぞ出でく

る。』かうやうあるを見てや、(以上現在を觀察す以下過去を追憶す)むかし安倍の仲麻呂といひける人は、唐土へ渡りて、歸りてきたる時に、船に乗るへき所にて、かの國人、馬の饑しあかれ惜みて、彼所の唐歌作りおどしける、あかすやありけん、二十日の夜の月出るまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。それを見て、仲麻呂のぬし、我國にはかゝる歌を、神代より神もよみたび、今の上中下の人もかうやうに別れ惜み、よろこびもあり、かをしみもある時には、詠むとてよめりける歌。

あをうをばら、ふりさけ見れば、春日ある、

三笠の山に、いでし月かも。

とぞよめりける。かの國の人、聞き知るまどく覺えたれど、ことの意を、男文字にさまを書き出して、この詞傳へたる人といひ

知らせければ、意をや聞き得たりけん、いと思ひの外にかん愛でける。(以上追憶)唐土とこの國とはことば異なるものかれど、月の影の同じことあるへければ、人の心も同じことおやあらん。(以上推理)

習説

尾藤 二洲

攀<sub>ニ</sub>絶<sub>ニ</sub>壁<sub>ニ</sub>踏<sub>ニ</sub>懸<sub>ニ</sub>崖<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>眩<sub>ニ</sub>焉<sub>ニ</sub>乃<sub>レ</sub>人<sub>ノ</sub>情<sub>ヲ</sub>而<sub>レ</sub>山<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>民<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>眩<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>涉<sub>ニ</sub>狂<sub>ニ</sub>濤<sub>ニ</sub>登<sub>ニ</sub>驚<sub>ニ</sub>瀾<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>憚<sub>ニ</sub>焉<sub>ニ</sub>乃<sub>レ</sub>人<sub>ノ</sub>情<sub>ヲ</sub>而<sub>レ</sub>海<sub>ノ</sub>上<sub>ノ</sub>民<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>憚<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>天<sub>ノ</sub>絶<sub>ニ</sub>壁<sub>ニ</sub>懸<sub>ニ</sub>崖<sub>ニ</sub>衝<sub>ニ</sub>天<sub>ノ</sub>且<sub>レ</sub>欲<sub>ニ</sub>顛<sub>ニ</sub>狂<sub>ニ</sub>濤<sub>ニ</sub>驚<sub>ニ</sub>瀾<sub>ニ</sub>捲<sub>ニ</sub>地<sub>ニ</sub>且<sub>レ</sub>忽<sub>ニ</sub>倒<sub>ニ</sub>彼<sub>ノ</sub>冥<sub>ノ</sub>爲<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>眩<sub>ニ</sub>憚<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>習<sub>ニ</sub>使<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>然<sub>ニ</sub>也<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>習<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>熟<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>山<sub>ノ</sub>海<sub>ノ</sub>之<sub>ノ</sub>險<sub>ヲ</sub>猶<sub>ニ</sub>可<sub>ニ</sub>夷<sub>ニ</sub>視<sub>ニ</sub>况<sub>ニ</sub>事<sub>ノ</sub>之<sub>ノ</sub>近<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>人<sub>ノ</sub>情<sub>ノ</sub>者<sub>ノ</sub>乎<sub>ノ</sub>然<sub>ニ</sub>世<sub>ノ</sub>之<sub>ノ</sub>爲<sub>ニ</sub>學<sub>ニ</sub>者<sub>ノ</sub>孜孜<sub>ニ</sub>矻<sub>ニ</sub>矻<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>勤<sub>ニ</sub>焉<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>言<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>才<sub>ノ</sub>藝<sub>ノ</sub>百<sub>ノ</sub>職<sub>ノ</sub>之<sub>ノ</sub>務<sub>ヲ</sub>終<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>ニ</sub>克<sub>ニ</sub>其<sub>ノ</sub>志<sub>ノ</sub>者<sub>ノ</sub>何<sub>ノ</sub>也<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>豈<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>習

之。不。熟。邪。嗚。呼。山。中。之。民。善。其。事。而。吾。不。能。也。海  
 上。之。民。善。其。事。而。吾。不。能。也。即。其。孜孜。矻。矻。惡。在。  
 其。為。習。也。』是。以。君。子。其。考。也。洽。其。思。也。精。循。循。不  
 已。釋。釋。其。達。無。不。明。焉。無。不。察。焉。而。言。行。才。藝。百  
 職。之。務。凡。其。所。習。無。之。而。不。自。得。焉。乃。可。以。攀。絕  
 壁。可。以。踏。懸。崖。可。以。涉。狂。濤。可。以。歷。驚。瀾。天。下。之  
 事。何。不。可。為。之。有。此。君。子。之。所。以。為。習。也。歟。抑。亦  
 君。子。之。所。以。不。器。也。哉。』

第二 情想

情想とは凡て快樂、苦痛に關係して動く所の心狀をいふ。喜悅、悲歎、怨怒、恐怖、戀愛等の心狀これなり。今之れを區別すれば

(一) 私情

(二) 同情

(三) 中情

の三種あり。

(一) 私情……とは、自己を主として發動する所の極めて單純なる情緒をいふ。それは自己の境遇若くは名譽等に於ける愉快若くは苦痛、あるは自己と特殊の關係を有したるもの、即ち自己の父母、妻子等に關係したる感情これなり。例へば加賀の千代女か夫に別れし時の句に「起てみつ寝てみつ悔のひろき哉」といへる。又或人か孫を失ひてその翌年の七月于蘭盆といふ日か、その孫か位牌へ靈供を備ふとして「去年まで叱た瓜を手向哉」といへる句の如きこれなり。

杜鵑を聞きて感あり

瀧澤馬琴

庚子四月十五日の朝、杜鵑の始めて鳴くを聞く。立夏後十日か

り。(以上現在を觀察す) 去年の、立夏の日より鳴きぬ。(以上過去を追憶す) 今茲の、去年より十日後れたるは、季候の遅速あればあり。(以上過去現在を合す) 吾この、鳥の聲を聞く毎、故兒琴嶺のことを思ひ出で、悒悒たり。(以上即ち私情に屬す) 物よりて、懐舊の情あること皆去かり。景ふよりて情起り、情をもて景を思ふ。脆き人の心あるか。(以上これ推想)

答蘇武書

李

陵

自從初降、以至今日。身之窮困、獨坐愁苦。終日無睹。但見異類。韋韜毳幕、以禦風雨。羶肉酪漿、以充饑渴。舉目言笑、誰與爲歡。胡地玄冰、邊土慘裂。但聞悲風蕭條之聲。涼秋九月、塞外草衰。夜不能寐。側耳遠聽。胡笳互動。牧馬悲鳴。吟嘯成羣。邊聲四起。晨坐聽之、不覺淚下。(上下節略)

哭亡兒湘文

廖

崇

舟

康熙歲次癸未八月十五夜、吾兒湘竟舍予而歿矣。孰謂汝年甫生一十有九、竟舍予而歿耶。汝生小好嬉戲、不親筆墨。予爲汝成人計、不得不過爲督責。汝竟不思改悔、予亦付之無奈矣。然見汝輒不色喜。汝有緩急、亦不敢向予告訴。而不謂遂有今日也。茲歲三月日、天未曙、汝忽從外來家、叩門急、血流被面。哭訴夜間爲某兇手所毆。予時亦以汝所交匪類、且多酒過、受毆固宜。竟不知其已受重傷矣。然予雖不汝喜、汝母甚慈愛汝、不難顯言受創之處。急爲救藥、當不致大害。而無如適值汝妹科秀之變。汝母悲思方切、固無暇他慮。汝意亦

以為身雖受傷久之當自痊。可豈知其禍之至此耶。迄今八月六日汝忽得病。予疑為傷寒症。略為調理。越三日見汝吐血。狼藉予始大驚。請醫診視。云肺經受傷。因以其方治之。血為少止。然咳愈動。每一咳動則遍身作痛。呼聲不絕。且所吐痰多稠而腥穢。不數日而遽奄然殤歿矣。嗚呼痛哉。甫歿之夕始有人言汝受毆之次日即吐痰血。又言汝足心受傷。及入殮時果見脊背多作青黑色。而左足心尤甚。曾聞人言仇欲致人死地必加功足心。足心受毒血凝於肺。過一月不治日久變為織痰而成咯症。則不可救矣。汝之受禍得母類是。嗚呼。予與其無仇隙。奈何忍以毒手如汝。汝又不肯自

言父母無由療治。致汝不得其死。豈命數使然耶。抑予多生宿孽之所致耶。由今思之。追悔何及。予家門祚衰薄。自始祖至予身已歷一十有三世。惟六世祖之後始分為三房。今兩房又不祀。予育汝兄弟二人。汝叔亦僅得一子。予見嗣續寥寥。每以為憂。汝雖不學。守成有餘。方擬今冬為汝婚配。從此克昌厥後。不難。孰謂汝竟不能自保其身耶。予今年已六十矣。又書生文弱。既不能庇汝躬於生前。後不能報汝怨於身後。此汝恨也。亦予終身之恨也。予將奈之何哉。傳稱冤死者能為厲。鄭伯有是已。汝能為厲鬼以誅之乎。抑將泣訴上帝以殛此頑兇乎。是皆未可知。然使果能為之。亦已無救。

汝之死而慰予之生也。況不能乎。嗚呼已矣。不可問矣。亦惟使汝聞之。知汝父之苦衷而已。他復何望耶。嗚呼痛哉。」

(二)同情……とは、他人の身は係る快樂苦痛をは、己の身は係るものと同じの感情を起すをいふ。例へば他人困苦の状態、若くは癡疾孤獨の徒を憐察するもの。あるは他人の快樂に關する事を見て、己れも均しく快樂の心状を起すが如きこれなり。

豪將琵琶ふ泣く

室鳩巢

相州北條の幕下、佐野の城主天徳寺の豪健の勇將ありしが、或時琵琶法師を招きて、平家を語らせて聞さける。未だ語らぬ先、琵琶法師のいひけるは、某の惟哀れある事をさ、度こそあれ、その心得して語り候へといへむ。法師心得候とて、佐々木四

郎高綱が宇治川の先陣を語りける。天徳寺あはれがりて、雨あづくを流しける。扱今一曲前の如く哀ある事をさ、度といへば。那須の與市宗高が扇の的を語りける。平家をかばより天徳寺又落涙數行ふ及べり。後日家臣の輩、過し日の平家の如何さ、つるといふ。家臣とも尤もかもしろき事にて候。但し我等とも、一、意得ぬ事こそ候へ。前後二曲共、勇烈なる事にて憐れなる方、少しも候はぬ。君には御感涙、咽はれて候。是はいかゝの事にて候にや。今、不審ある事、何れも申あひ候といへば。天徳寺驚きて、只今までは各、を頼もしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さして力を落して候。先、佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝舍弟の蒲冠者も賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ。生、生、高綱に賜はるに非ずや。さればそのかひもかく、此馬



にて宇治川を先陣せすして、人に先をこされおぼ、必打死して再び歸るまじき、と頼朝お暇をしておける。その志を察して見られよ。あはれおらぬ事かは、とて數、涙を拭ひつゝ、暫しありていひける。又那須、與市も大勢の中より擇はれて、唯一騎陣頭に出しより。馬を海中に乗りいれて、的に向うに至るまで、源平兩家鳴りを去づめて之れを見物するに。若し射損おぼ御方の名折つたるべし、馬上にて腹かき切りて海に入らんと、覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道ほと哀あるものは候はず。某は味お戰場に臨みて、高綱、宗高が心にて槍を取り候故、右の平家をきく時、も兩人の心を思ひやりて落涙、堪へざりし。然るに各には憐れにおかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は只一旦の勇氣に任せて眞實より出るにてはあきおやと、思はれ候。それお

ては頼もしからすこそ候へと言ひしかは、諸臣皆迷惑して辭おかりしとあり。(以下、節略)

天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌

中皇命

ハ陽知し、わが夫君の、あしたお、とりあてたまひ、ゆふべには、いよせて、し、みとらしの、梓の弓の、あかはすの、おとすあり。朝獵お、今たゝすらし。夕獵お、今たゝすらし。みとらしの、梓の弓の、あかはすの、おとすあり。

たまきはる内の大野お馬あめて

あさふますらむそのくさむけ』

瘞旅文

王陽明

維正徳四年秋月三日、有吏目云、自京来者、不知

其名氏。携一子一僕。將之任。過龍場。投宿土苗家。予從籬落間。望見之。陰雨昏黑。欲就問訊。北來事不果。明早遣人覘之。已行矣。薄午有人自蜈蚣坡來云。一老人死坡下。傍兩人哭之哀。予曰。此必吏目死矣。傷哉。薄暮復有人來云。坡下死者二人。傍一人坐嘆。問其狀。則其子又死矣。明早復有人來云。見坡下積屍三馬。則其僕又死矣。嗚呼傷哉。念其暴骨無主。將二童子持畚鍤往瘞之。一童子有難色。然予曰。嘻。吾與爾猶彼也。二童憫然。涕下請往。就其傍山麓為三坎埋之。又以雙鷄飯三盂。嗟吁涕洟而告之曰。嗚呼傷哉。緊何人。緊何人。吾龍場驛丞餘姚王守仁也。吾與爾皆中土之產。吾不

知爾郡邑。爾烏為乎。米為茲山之鬼乎。古者重去其鄉。遊官不踰千里。吾以竄逐而來。此宜也。爾亦何辜乎。聞爾官吏目耳。俸不能五斗。爾率妻子躬耕可有也。烏為乎。以五斗而易爾七尺之軀。又不足而益以爾子與僕乎。嗚呼傷哉。爾誠戀茲五斗而米。則宜欣然就道。烏為乎。吾昨望見爾容。感然。蓋不任其憂者。夫銜肩霧露。扳接崖壁。行萬峯之頂。饑渴勞頓。筋骨疲憊。而又瘴厲侵其外。憂鬱攻其中。其能以無死乎。吾固知爾之必死。然不謂若。是其速。又不謂爾子爾僕亦遽爾奄忽也。皆爾自取。謂之何哉。吾念爾三骨之無依。而來瘞爾。乃使吾有無窮之愴也。嗚呼傷哉。縱不爾瘞。幽崖之孤

成羣陰壑之虺如車輪亦必能葬爾於腹不致久  
 暴露爾爾既已無知然吾何能為心乎自吾去父  
 母鄉國而來此二年矣歷瘴毒而苟能自全以吾  
 未嘗一日之戚戚也今悲傷若此是吾為爾者重  
 而自為者輕也吾不宜復為爾悲矣吾為爾歌爾  
 聽之歌曰連峯際天兮飛鳥不通遊子懷鄉兮莫  
 知西東莫知西東兮維天則同異域殊方兮環海  
 之中達觀隨寓兮莫必予宮魂兮魂兮無悲以恫  
 又歌以慰之曰與爾皆鄉土之離兮蠻之人言語  
 不相知兮性命不可期吾苟死於茲兮率爾子僕  
 來從予兮吾與爾趣以嬉兮驂紫彪而乘文螭兮  
 登望故鄉而嗟唏兮吾苟獲生歸兮爾子爾僕尚

爾隨兮無以無侶悲兮道傍之塚累累兮多中土  
 之流離兮相與呼嘯而徘徊兮殍風飢露無爾飢  
 兮朝友麋鹿暮棲與柶兮爾安爾居兮無為厲於  
 茲墟兮』

(三)中情……とは最も複雑にして高尚なる感情をいひ。真理上に於ける求知の満足、若くは發見の愉快。あるは雅美と醜陋とに於ける感情。又は徳義、不徳義等に於ける感情の如きこれあり。

方丈記一章

鴨 長 明

賤山がつも、力盡きて、薪たきへ乏しくありゆけば、頼むかたあ  
 き人は、家を毀ちて、市に出で、賣るに。一人が持ち出でたる價、  
 猶一日が命を支ふるにたに及ばすとぞ。『怪しき事は、かゝる薪の  
 中に、丹つき白金黄金の箔を、所々につきて見ゆる、木のわれあ

ひまじれり。これを尋ぬれば術なき者の、古寺に至りて佛を盗み、堂の物の具を破り取りて、わりくだけるをりけり。『濁惡の世にも生れ逢ひて、かゝる心うきわぎを見侍りし。』

愛蓮説

周茂叔

水陸草木之花、可愛者甚蕃。晉陶淵明獨愛菊。自李唐來、世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻玩焉。予謂菊花之隱逸者也。牡丹花之富貴者也。蓮花之君子者也。噫、菊之愛、陶後鮮有聞。蓮之愛、同予者何人。牡丹之愛、宜乎衆矣。』

爲善最樂説

佐藤一齋

絲竹管絃、果樂乎。吾見鼙、其耳也。絲綺文錦、果樂乎。吾見盲、其目也。膏粱旨甘、果樂乎。吾見爽、其口也。酒爛、其腸而色伐、其性。狗馬弋獵、暴其氣、宮室臺榭、惰其體。凡人之所趨、以爲樂者、吾意未見其爲樂也。至於爲善之樂、則異於此。爲子而孝、竭其力而勞、其心爲臣而忠、致其身而厲、其精凡其所以爲善者、殆如見其可苦而未見其爲樂者也。然而孝於親、則親樂。忠於君、則君樂。推諸家、則家樂。施諸國、則國樂。措諸天下、則天下樂。夫天下皆樂、我何獨不樂。盎然其若春煦也。燠然其若暖嘘也。熙熙然其若百鳥和而羣、芳粵也。嗚呼、是皆爲善之推也。而其爲樂、果爲何如哉。東平王蒼語人曰。

爲善最樂。庶其有見於此一歟。』

第三 意想

意想とは外部の事情、若くは内部の心力に因れる心意、一切の發動作  
用をいふ。それは願望、決心等の心狀これあり。今之れを區別すれば、

- (一) 感情に關する意想
- (二) 智力に關する意想

の二種とす。

かれとは學理上より區別せしものなり。而してその實際上心意の  
發動に至りては、何れの場合に於ても、二者相待ちて發動せざるを  
し。蓋感情は毎に意想即ち發動作用の主因たり。而して智力は唯その  
發動に於ける目的の方向を示指するのみ。

手書くこと

本居宣長

万よりも手をよくかゝるは、ほしき業あり。歌よみ學問をどする人  
は、殊に手あしくては心劣りのせらるゝを。それ何かは苦しから  
んといふも、ひとあたり理はさることながら。猶飽かず打あは  
ぬこゝちぞするや。』宣長いと拙くて、常に筆とる度毎に、最口惜  
う、いふがひなく、おぼゆるを。人の乞ふまゝに面なく短冊一ひ  
らちど書出で見るにも、我ながらだにいとかたはに、見苦しうか  
たくおなるを、人いかに見るらん、と耻しく胸いたくて。あか  
いし程にちどて手習はせざりけん、といみじうくやしうかん。』

上高宗封事

胡澹菴

略上 臣備員樞屬、義不與檜等共載天。區區之心、願  
斬三人頭、竿之藁街。然後羈留虜使、責以無禮。徐  
與問罪之師、則三軍之士不戰而氣自倍。(以上願望)

不然、臣有下赴東海而死耳、寧能處小朝廷、求活邪。  
(以上決心  
を示す)

伐項羽檄

漢高帝

天下共立義帝、北面事之。今項羽放殺義帝於江南、大逆無道、寡人親為發喪、諸侯皆縞素。悉發關內兵、收三河士、南浮江漢以下、願從諸侯、王擊楚之殺義帝者。」

與韓愈論史官書

柳子厚

正月二十一日、某頓首、十八丈退之侍者。前僕書言史事、云具與劉秀才書、及今乃見書、藁私心甚不喜。與退之往年言史事、甚大謬。若書中言退之不、宜一日在館下、安有探宰相意、以為苟以史榮

一韓退之耶。若果爾、退之豈宜虛受宰相榮、已而冒居館下、近密地、食奉養、役使掌故、利紙筆、為私書、取以供子弟費、古之志於道者、不宜若是。且退之以為紀錄者、有刑禍、避不肯就、尤非也。史以名為褒貶、猶且恐懼不敢為。設使退之為御史中丞、大夫、其褒貶成敗、人愈益顯、其宜恐懼尤大也。則又將揚揚入臺府、美食安坐、行呼唱於朝廷而已耶。在御史猶爾。設使退之為宰相、生殺出入、升黜天下士、其敵益眾、則又將揚揚入政事堂、美食安坐、行呼唱於內庭外衢而已耶。何以異不為史而榮其號、利其祿者也。又言不有人禍、則有天刑。若以罪夫前古之為史者、然亦甚惑。凡居其位、思直

其道。道苟直。雖死不可回也。如回之。莫若亟去其位。孔子之困於魯衛陳宋蔡齊楚者。其時暗。諸侯不能以也。其不遇而死。不以作春秋故也。當其時。雖不作春秋。孔子猶不遇而死也。若周公史佚。雖紀言書事。猶過且顯也。又不得以春秋為孔子累。范曄恃亂。雖不為史。其族亦誅。司馬遷觸天子喜怒。班固不檢下。崔浩沽其直。以鬪暴虜。皆非中道。左丘明以疾盲出於不幸。子夏不為史。亦盲。不可以是為戒。其餘皆不出此。是退之宜守中道。不忘其直。無以他事自恐退之之恐。唯在不直不得中道。刑禍非所恐也。凡言二百年文武士多有誠如此者。今退之曰。我一人也。何能明。則同職者。又所

云若是。後來繼今者。又所云若是。人人皆曰。我一人。則卒誰能紀傳之耶。如退之。但以所聞知。孜孜不敢怠。同職者。後來繼今者。亦各以所聞知。孜孜不敢怠。則庶幾不墜。使卒有明也。不然。徒信人口語。每每異辭。日以滋久。則所云磊磊軒天地者。未必不沈沒。且亂雜無可攷。非有志者所忍恣也。果有志。豈當待人督責迫感。然後為官守耶。又凡鬼神事。渺茫荒惑。無可準。明者所不道。退之之智。而猶懼於此。今學如退之。辭如退之。好言論如退之。慷慨自為。正直行焉。如退之。猶所云若是。則唐之史。述其卒無可託乎。明天子賢宰相。得史才如此。而又不果。甚可痛哉。退之宜更思。可為速為果。

卒。以。爲。恐。懼。不。敢。則。一。日。可。引。去。又。何。以。云。行。且。謀。也。今。當。爲。而。不。爲。又。誘。館。中。他。人。及。後。生。者。此。大。惑。已。不。勉。已。而。欲。勉。人。難。矣。哉。』

第二節 形體上の區別

思想の形體、即ち智力上の觀念を分ちて左の二種とす。

第一 虚想

第二 實想

實想とは主觀と客觀とを問はず、有形と無形とを論せず。凡て萬有の實在を自己の心意の上より認識したるものをいふ。虚想とは萬有の實在、若くは消長變化等に關する凡ての理法をば自己の心意の上より探究、考察するものをいふ。されは實想は單に事實を認識して虚想を構成する要素とあるもの、

て、虚想は多くの要素を聚めて真理の所在を認識するに在り。故に實想上の認識おして誤謬ある時は固より虚想上の確實を期する能はず。されとも之れを考察する方法は他學科の關する所にて文章組立法の主とする所にあらず。故にその方法の如何は省きて。余はた、虚想と實想とに關する大要を左より區別せんとす。

第一 虚想

虚想を分ちて左の三種とす。

(一) 推測

(二) 斷定

(三) 懷疑

第二 實想

實想の概要を分ちて左の七種とす。



(一) 性質

曲直 善惡 粗密 剛柔 優劣 強弱 輕重 難易 寬嚴 濕燥 冷熱 醜美

- (一) 性質
- (二) 形狀
- (三) 動作
- (四) 分量
- (五) 位置
- (六) 時間
- (七) 空間

この七種の概要を細列すれば又左の如し。

智愚 苦樂 正邪 真偽

(四) 分量

(三) 動作

上	高	過	盈	增	深	多	來	出	死	緩	進
下	低	不	虧	減	淺	少	往	入	生	急	退
		及									

(二) 形狀

興	盛	消	勝	有	長	大	縱	廣	方	五	五
亡	衰	長	敗	無	短	小	橫	狹	圓	味	色

(五)位置

前後  
内外  
表裏

(六)時間

遠近  
過去  
現在  
未来

(七)空間

以上の區別は、固よりその概要に過ぎず。且この問題は他の學科の版圖に屬すれば、深くこれを究むる必要なし。唯こゝにはそれが文章と關係したる大要のみを示しおは足れりと思へり。因りて今この區別に基

き、一二の文例についで、それが一斑を説明せんとす。されど虚想上の區別は、その説明を待たざるも明瞭あるべければ省きつ。

遣唐使の子、虎ふ食はるゝ事 宇治拾遺物語 源 隆 國

今は昔、(時間を叙す)遣唐使ふて唐土に渡りける人の、十ばかりなる子を見見であるまじかりければ、具して渡りぬ。』さて過しける程(以上動作を叙す)雪のいと高く降りたりける日、(以上形状を叙す)歩行もせて居たりけるに、この兒の遊に出で、往ぬるが、遅く歸らざりければ、怪しと思ひて出で、見れば、(以上動作を叙す)足跡後の方から踏みて行きたるにそひて、大なる犬の足跡ありて、それよりこの兒の足跡見えず、(以上形状を叙す)山がまふ行きたるを見て、これは虎の食ひていさけるおめりと思ふに、せん方なく悲しくて、太刀を抜きて、足跡を尋ねて山の方へ行きて見れば、(以上動作を叙す)岩屋の口よ、(位置を叙す)この兒

を食ひ殺して腹をねぶりてふせり。太刀を持ちて走り寄れば、え逃げても往かて、かいかゞまりて居たるを、太刀ふて頭を打ては、鯉の頭を割るやうにわられぬ。次にまた、側そばさまに食はんとて走り寄る背を打てば、背骨をうち切りてくだくとおしつ。さて子をば死かせにたれども、脇にかいはさみて家に歸りたれば、その國の人々見ておぢあざむ事かぎりおし。(以上動作)

鉛罌潭記

柳子厚

鉛罌潭、在二西山一。其始蓋舟水自南奔注。抵山石、屈折東流。其典委勢峻、盪擊益暴、齧其涯。(三句動作)故旁廣而中深。(一句形狀)畢至石乃止。流沫成輪、然後徐行。(二句動作)其清而平者、且十畝、有樹環焉。有泉懸焉。(二句形狀)其上有居者、以予之亟游。

也。一旦欵門來告曰。(二句動作)不勝官租私券之疾。積既芟山而更居。願以潭上田質財以緩禍。(二句願意上の動作とす)予樂而如其言。則崇其臺、延其檻、行其泉於高者、墜之。(二句動作)潭有聲深然。(一句形狀)尤與中秋觀月為宜。(一句感想上)於以見天之高、氣之迥。(一句迥に起句なる在西山西の句に)孰使予樂居夷而忘故土者、非茲潭也歟。(一句自己の感情を叙す感情)

第三節 分量上の區別

分量とは思想の中に含有せられたる意味の多寡をいふ。而してこの分量の多寡によりて思想區域上の廣狹は確定せらるゝものあり。今この分量上よりこれを區別すれば、

第一 汎想

第二特想

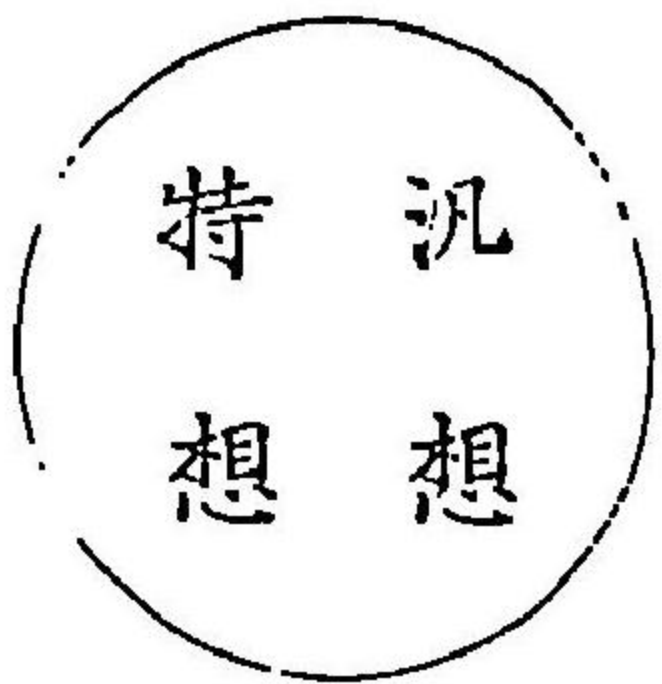
の二種とす。

汎想とはその區域の最も廣大なるものにて、或る特別の事實を主とせずして、普通の事實に於ける原理的思想、あるいは全般に通應せらるべき思想を主としたるものをいふ。

特想とはその區域の最も狭小なるものにて、普通の事實に於ける原理を或る特別の事實の上へ結いつけたるもの、あるいは局部に限られたるものをいふ。

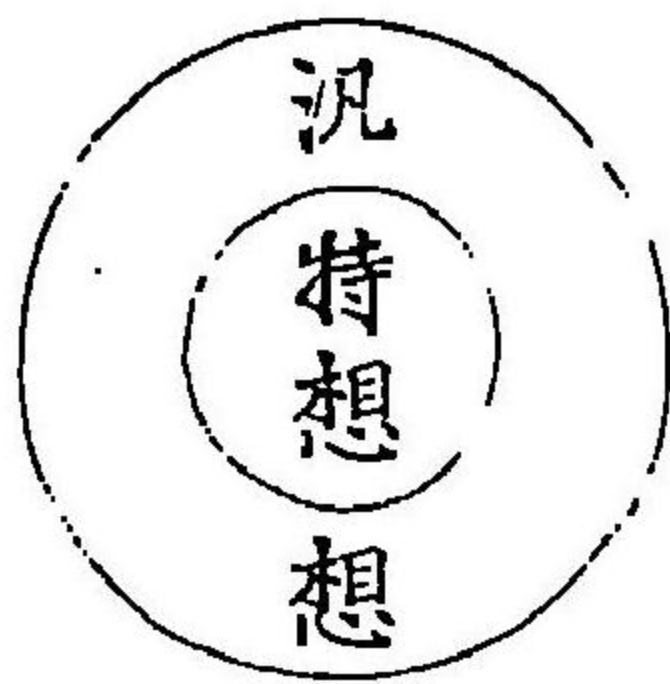
されば特想の分量を汎想に比すれば同一なる場合はあれど、汎想の分量の上へ超出することなし。汎想の分量を特想に比すれば又同一なる場合はあれど、特想の分量よりも減少することなし。この二の思想を互に分量を同くするとき、其の形體上に於ても同一の結果

第一圖 分量の同一



を生むべけれども、分量の多寡を異にして特想に於ける分量の汎想よりも寡少あるときは、特想の分量は必ず汎想の分量の中に含有せらるべきものとす。今圖を以て之れを示さむ。

第二圖 分量の不同



第一圖は汎想も特想もその分量ふ多少の差あることなければ、互にその一個の環を共に走るものありとす。又第二圖に於ける特想の分量は汎意の中へ含有せられたるものにて汎想の環中に一小環を作りたるものを特想の部分とす。今この二圖をもて文章の上に例せん。

第一例……………論語

子不語。(汎想)怪、力、亂、神。(特想)

の如きは、その不語といへる汎意の分量も、怪力亂神といへる特想の分量も、同一なるものにて、語らすといへる意味の中には怪力亂神を除きてはその外に語らすといふものなければあり。

第二例……………蘇老泉管仲論

夫功之成、非成於成之日、蓋必有所由起。禍之作、不作於作之日、亦必有所由兆。(汎想)故齊之治也、

吾不曰管仲、而曰鮑叔。(鮑叔は齊の功臣)及其亂也、吾

不曰豎刁、易牙、開方、而曰管仲。(管仲は齊國の禍因を成す)

この汎想は禍功の原因あるを説き、その特想は於て齊國治亂の主要因者を挙げたり。こは特想上の分量をべて汎想の中に包容せられたるものありとす。

されは思想の分量の上へかく劃然たる區別ある以上は文章に於ても之れを區別することの必要あるは疑なし。

古采法格の嚴重ある文章は必ず初段汎想をもて起り、中段に特想を掲げて前段の汎想と連絡を通し、後段に至りてこれを結束したり。おれど文章は必ず汎意を挙げざるを得ずといふはあらず。その簡單なるものゝ在りては直に或る特別の事實に原理を結ひつけたるものをもて全篇を終へたるものあり。又學理上の文、あるは事物の原理

を主としたるものは単に汎想のみをもて全篇を貫きたるものもあり。今左に一二の文例を示さんとす。

單一ある汎想の文例

道可道非常道章

老子

道可道。非。常。道。名。可。名。非。常。名。無。名。天。地。之。始。有。名。萬。物。之。母。故。常。無。欲。以。觀。其。妙。常。有。欲。以。觀。其。微。此。兩。者。同。出。而。異。名。同。謂。之。玄。玄。之。又。玄。衆。妙。之。門。

單一ある特想の文例

讀孟嘗君傳

王安石

世皆稱孟嘗君能得士。士以故歸之。而卒賴其力。以脫於虎豹之秦。嗟呼。孟嘗君特鷄鳴狗吠之雄

耳。豈足以言得士。不然。擅齊之強。得一士焉。且可以南面而制秦。尚何取鷄鳴狗吠之力哉。鷄鳴狗吠之出。其門。此士之所以不至也。

特想と特想と連結したる文例

爲巨室章

孟子

孟子見齊宣王曰。爲巨室。則必使工師求大木。工師得大木。則王喜。以爲能勝其任也。匠人斲而小之。則王怒。以爲不勝其任矣。夫人幼而學之。壯而欲行之。王曰姑舍。女所學而從我。則何如。(以上第一の特想を)今有璞玉於此。雖萬鎰。必使玉人彫琢之。(以上第二の特想を)至於治國家。則曰姑舍。女所學而從我。則何以異於教玉人彫琢玉哉。(二個の特想を以て主たる特想と相連絡す)

汎想と特想と連結したる文例

徒然草一節

吉田無好

その物につきて、そのものを費し、害ふもの數を知らずめり。(以上汎想) 身に虱あり。家に蠶あり。國に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。(以上特想)

其二例

伯夷頌

韓退之

士之獨立獨行、適於義而已。不顧人之是非。皆豪傑之士、信道篤而自知明者也。一家非之、力行而不惑者寡矣。至於一國一州非之、力行不惑者、蓋天下一人而已矣。若至於舉世非之、力行而不惑者、則千百年乃一人而已耳。(以上汎想) 若伯夷者、窮

天地互萬世而不顧者也。昭乎日月、不足為明、舉乎泰山、不足為高、巍乎天地、不足為容也。當殷之亡、周之興、微子賢也、抱祭器而去之。武王周公聖也、從天下之賢士、與天下之諸侯而往攻之。未嘗聞有非之者也。彼伯夷、叔齊者、乃獨以為不可。既滅矣、天下宗周、彼二子乃獨恥食其粟、餓死而不顧。(以上特想) 由是而言、夫豈有求而為哉。信道篤而自知明也。(以上汎想と特想と) 今世之所謂士者、一凡人譽之、則自以為有餘。一凡人沮之、則自以為不足。彼獨非聖人、而自是如此。夫聖人乃萬世之標準也。予故曰、若伯夷者、特立獨行、窮天地、互萬世而不顧者也。雖然、微二子亂臣賊子、接迹於後



世一矣。』(以上特想)  
を説く

### 第四節 關係上の區別

關係上の區別とは思想と思想との輕重、即ち主想と客想との關係如何を識別するをいふ。

主想は事情の既に確定せられたるものまで、全篇の文章中最も主要なる地位を占むるものとす。而して多くの思想を統括して、それが主腦精神とあるべき部分あり。

客想はその事情の不定にして、何れの場合に在りても主想に従屬し、もてゆき、主想の品性を保助して、その目的を明確ならしめ、又主想の地位を回護して、その勢力を強大ならしめんことを勉むべきものあり。故に主想に對しては飽くまで主想そのもの精神を見はすことに盡力すべきものにして、決して之れに向うて一點の傷害を加ふべ

からさるのみならず、又主想と矛盾すべき思想を避けさるべからず、主想と無關係若くは不必要の思想を避けさるべからず。されば客想の主想の信任官あり、主想の辯護人あり、而して又その證據人たることを忘るべからず。

### 第一 主想

それ文章は自己の主想をもて他人に傳ふることを目的とするものなるがゆゑに、もしその主想を吐露したるのみにて明明白白、復一點の疑をからしめば、故らに繫縛ある客想を假るべき必要をかるべし。されど平易卑近ある主想は姑くこれを措き、その容易に了解し難きものに在りては、勢他の思想を引き来りて説明の用に供せさるべからず。況して意義の容易に了解し易き主想も、それのみにては無味淡泊にして、讀者に毫髮の感動を與へざるものあるに於てをや。さればこ

をある主想に對しては、客想を引き出で、これを形彰する必要ある所以あるへけれ。

(一) 不明晰

不明晰とはその意味の深奥にして一言一句に盡す能はざるもの、多義に渉るもの、又ハ不審不定、若クハ不確實のものにて、如何なる觀察をなすも、到底一個の確定したる意味に歸著せられざるものをいふ。かゝる思想に於ては、正當にその中に含有せられたる意味を解釋するを以て、説明上の良法とあすものなれども、又或る場合によりては、正當の解釋よりも、他の客想をもて之れを形映することを至便の法とあすことあり。例へば、孟子に不仁をあすものは到底死亡を免れざるへしといへる意味をば、理想の上より説明せずして客想上の形映をもて、

今惡ニ死ニ亡ニ而樂ニ不仁ニ(主想)是猶ニ惡ニ醉ニ而強酒ニ(客想)とあきたるか如きこれあり。

(二) 無味

無味とはその主想の性質上明白なれども、無味淡泊にして、讀者に少しの感動を與へざるをいふ。かゝる主想に對しては、客想を引き来りて多少の趣味を附與するを要す。

學理に關したる思想を文に表彰するには、趣味を附與することの必要なきのみならず、却りて趣味を附與せんとして勢、修飾的の文字に流れ、學理の真相を害することあり。されど一方より觀れば學理的の主想は興味薄くして人の心を厭倦の道に誘導するものなるが故に、場合によりては人の注意を引き起さしめんがために趣味を附與すること必要あるあり。この場合には或る適當の程度を量りて客想を

假り来り、その主想を形映せざるべからず。  
學理上の主想既に去かり、況して審美上の主想に於てをや。例へば韓退之の送楊少尹序の中に、

昔疏廣受二子、以年老一朝辭位而去。于時公卿設供張、祖道都門外、車數百兩、道路觀者多歎息泣下、共言其賢。漢史既傳其事、而後世工畫者、又圖其迹。至今照人耳目、赫赫若前日事。(以上客想)國子司業、楊君巨源、方以能詩訓後進。一旦以年滿七十、亦白丞相去歸其鄉。世常說古今人不相及。今揚興二疏、其意豈異也。(以上主想をもて客想と連絡す)

の如きこれあり。こは主たる揚少尹か老年まで公に奉仕したれとも古郷忘れ難く、遂にその位を辭して歸國せられし意味を、讀者に向う

て強烈に感取せしめんとして、昔日の廣受二子をば、初段に引き出たるものとす。

### 第二 客想

客想の主想に於ける必要の關係は、主想の不明晰あるとき、又は無味あるときに在りとす。さるに主想の既に明晰なるもの、若くは趣味あるものに對して、客想を添へんには、客想の客想たる効果を遂ぐる能はざるのみならず、却りて主想の眞を傷害することあり。冗長思想若くは紛雜の思想は多くは、この誤謬に陥れるものあり。注意せざるべからず。

今客想を分ちて左の二種とす。

#### (一) 正客

正客は主想と直接なる正當の關係を有するものにて、客想中最も主

部の地位を占むるものとす。故に正客の主想と互に類似の點を以て相對するものあり、背異の部分を以て相對するものあり、あるは關係の上より相對するものあり。この小區別に至りては、第三章思想表章の客想撰定法の中に於て説明せんとなす。

(二) 陪客

陪客は正客の至らざる所を補佐して與に主想を表彰するものなれば。主想に對しては間接なるものとす。故に何れの場合に在りても正客の力のみにて不十分なる所には必ず陪客ありてこれを補佐しめてゆき、正客をして主想に十分の力を盡さしめんことを勉むるものとす。今又陪客を分ちて、

- (い) 副賓
- (ろ) 媒賓

の二種となす。

副賓とは、正客の勢力のみにては主想に對して十分の結果を見はす能はざるときに、これを正客の下に屬せしめ、應分の力を添へて主想を満足せしむるものをいふ。例へば孟子に祭紂の殘虐なる主想を表彰せんとする時、たゞ肉食をなす鷓といふ鳥のみにては十分ならざるゆゑ、鰻といへるものを副賓として、

故爲<sub>レ</sub>淵<sub>レ</sub>鰻<sub>レ</sub>魚者鰻也。(副賓) 爲<sub>レ</sub>叢<sub>レ</sub>鰻<sub>レ</sub>爵者鷓也。(正客)

爲<sub>レ</sub>湯武<sub>レ</sub>鰻<sub>レ</sub>民者祭紂也。(主想)

とさせるか如きこれあり。

又、媒賓は陪客中最も必要なるものにて、場合によりこれを缺けば、正客の主想に對して寸毫の効果を見はず能はず。されどこの媒賓は、普通の正客に應用せられずして、或る特殊の正客に於てのみ肝要なる

ものとする。或る特殊の正客とは、たゞ表面上主想に對して何等の關係なきが如きも、その實大に密著の關係を有するものをいふ。この場合には、媒賓の力によりて正客と主想との間に連絡を通せしめ、それをもて直接には正客に力を添へ、間接には主想に効果を盡きしむるものありとす。例へば蘇東坡の荀卿論に於ける、

嘗讀孔子世家觀其言論文章循循然莫不有規矩不敢放言高論言必稱先王然後知聖人憂天下之深也。茫乎不知其畔岸而非遠也。浩乎不知其津涯而非深也。其所言者匹夫匹婦之所共知而所行者聖人有所不能盡也。嗚呼是亦足矣。使後世有能盡吾說者雖為聖人無難而不能者不失為寡過而已矣。子路之勇子貢之辯冉有之智。

此三者皆天下之所謂難能而可貴者也。然三子者每不為夫子之所說。顏淵嘿然而不見其所能若無以異於衆人者而夫子亟稱之。且夫學聖人者豈必其言之云哉亦觀其意之所嚮而已。夫子以為後世必有不足行其說者矣。必有竊其說而為不義者矣。是故其言平易正直而不為非常可喜之論。要在於不可易也。(以上正客を引く)昔者嘗恠李斯事荀卿既而焚滅其書盡變古先聖王之法。於其師之道不啻若寇讐。(以上陪客中の媒賓を引く)及今觀荀卿之書然後知李斯之所以事秦者皆出於荀卿而不足怪也。荀卿者喜為異說而不讓。敢為高論而不顧者也。(以上主想を掲ぐ)

の一段の如し、こは正客なる孔子は平易正直を主として放言高論せられしこと亦く、實に人の模範ともあるべき人あるをいひて、直に主想ある荀卿の放言高論と連絡を通じて之れが罪を斷定せんとまたるあれど、荀卿もさるもの、到底放言高論せし證據を遺さず、故に直に之れを斷定するを得ず、即ちその門人ある李斯を引き出で、斯の秦國を亂し、は全くその師匠ある荀卿か放言高論をかきたりし結果か、りと斷定してもゆき、而してその主想と正客との間に於て互に連絡を通したるものあり。さればこゝに李斯を引ききたるは、全く媒質の勞を執らしめんか爲めあること疑もなし。

### 第三章 思想の表彰

#### 第一節 思想の組立

思想を組立る方法は、他の諸學科に關したるもの最も多し。故に余はこゝに他の諸學科に關したるものを省き、單に文の組立上に關したるものを説明せんとす。

文の組立上より思想を組立つる方法を分ちて二とす。第一統括、第二敷衍これあり。

#### 第一 統括

##### (一) 關係統括

關係統括とは最も複雑を極めたる統括にて多くの異種異類ある思想の中に、相互の關係ある所を認識し、もてゆきこれを一概念の下に統括するものをいふ。ゆゑにその範圍に於ては極めて廣大あるべく、隨

て資料の撰定上最も困難なるものあるべし。何と云ればその關係上より見れば廣大なる範圍を有するものにて、天地間に於ける萬有は一物として相互の關係を有せざるものあるべく、かれと異種異類ある中ふついで真正なる契合を發見することは容易の事にあらざればなり。まかし審美的に於ける統括は多くはこの法を用ゐたるものあり。蓋この法は差異の中に於て契合したる點を統括するものおれば、その文自ら奇骨にして人を感動せしむることも容易おればあり。例へば韓退之の後念九日後上宰相書に

其所輔理承化之功

といへる句は關係統括して、その上段ある天下の賢材云云より休徵嘉瑞云云までの異種異類ある句を統括したるものこれあり。又徒然草の第二章の

願はしかるべき事こそ多かめれ

といへる句を掲げ、下段に異種異類ある願望の事を説きたるも亦同し。

(二) 純正統括

純正統括とは最も純正なる思想、即ち多くの同種同類ある思想を聚めて一の大なる概念を構成するものをいふ。

この純正統括を用ゐて表彰せんには文章の上に自ら平易とありて、奇骨を欠く所あれば、審美的の文には多くは用ゐざるものとす。かれと學理的の思想を表彰せんには必ずこの理法を用ゐざるへからず。例へば孔子が衆善衆美の徳行を論語の中に説いて

仁

といふ一字に纏めたりしは即ちこの純正統括によれる者なりとす。

その他、佛氏の真如に於ける、老莊の無無に於ける、亦然りとす。

余は終に於て一言の注意すへきことあり、それは凡そ宇宙間の事物はその兩端を有せざるものあり、即ち差異の部分と類似の部分と互に混淆したるものあり、さればこの關係統括と純正統括との區別も關係は差異の部分多きもの、純正は類似の部分多きものを取りてこれを區別したる者にて、全く一方のみ偏したるものにあらずること、知るべし。下段の關係數行若くは純正數行も亦同じ。

第二 數行

(一) 關係數行

關係數行とは關係統括によりて組立てられたる思想、若くはその他の思想につき、それが關係ある點を認識し、もてこれを數行、誇張するをいふ。

そも文章を作為せんとするに臨みては、常にその思想の涸竭するに苦むもの多し。さるにこの關係數行の理法を會得せんには、該博ある思想を得べく、富贍ある思想を得べく、又流暢にして縦横ある文を作ることを得べし。何とあればこの關係といふことはその區域尤も廣大なるものにて、宇宙間の萬有、何物かは相互の關係を有せざらん。苟も博く察して而して審に研むれば、目前の事物悉く、文家の囊底に入らざるはあければあり。支那に於ける春秋戰國時代の文は、多くこの理法によりて數行せられたるものあり。東萊博議の文の如きも亦然りとす。

徒然草一章

吉田 兼 好

友とするに、わろきもの七つあり。(以上開)一には、高くやんごととあ  
まき人。二には、わかき人。三には、病なく身つよき人。四には、酒を



このむ人。五には、猛く勇める人。六には、そらごとする人。七には、欲ふかき人。（以上開）よき友、三あり。（以上開）一には、物くる、友。二には、くすし。三には、智慧ある友。（以上開）

枕草紙一章

清少納言

人にあまづらるゝもの。（以上開）家の北おもて。あまり心よしと人に知られたる人。年老いたるおきあ。又あわくしき女。築土つちがのくづれ。（以上開）  
（係敷行）

送孟東野序

韓退之

大凡物、不得其平則鳴。（以上開）草木之無聲、風撓之鳴。水之無聲、風蕩之鳴。其躍也、或激之。其趨也、或梗之。其沸也、或炙之。金石之無聲、或擊之。鳴。人之於言也、亦然。有不得已、而後言。其謔也、有思。其哭

也、有懐。凡出乎口、而爲聲者、其皆有弗平者乎。樂也者、鬱於中、而泄於外者也。擇其善鳴者、而假之鳴。金石、絲竹、匏土、革木、八者、物之善鳴者也。維天之於時也、亦然。擇其善鳴者、而假之鳴。是故、以鳥鳴春、以雷鳴夏、以蟲鳴秋、以風鳴冬。四時之相推奪、其必有不得其平者乎。其於人亦然。人聲之精者、爲言。文辭之於言、又其精者也。尤擇其善鳴者、而假之鳴。其在唐虞、咎陶、禹、其善鳴者也。而假之以鳴。夔、弗能以文辭鳴。又自假於韶、以鳴。夏之時、五子以其歌鳴。伊尹、鳴殷。周公、鳴周。凡載於詩書、六藝、皆鳴之善者也。周之衰、孔子之徒、鳴之。其聲大而遠。傳曰、天將以夫子爲木鐸、其弗信矣乎。其

末也。莊周以其荒唐之辭鳴於楚。楚大國也。其亡也。以屈原鳴。臧孫辰、孟軻、荀卿以道鳴者也。揚朱、墨翟、管夷吾、晏嬰、老聃、申不害、韓非、慎到、田駢、鄒衍、尸佼、孫武、張儀、蘇秦之屬。皆以其術鳴。秦之興。李斯鳴之。漢之時。司馬遷、相如、揚雄。最其善鳴者也。其下魏晉氏鳴者。不及於古。然未嘗絕也。就其善者。其聲清以浮。其節數以急。其辭淫以哀。其志弛以肆。其為言也。亂雜而無章。將天醜其德。莫之顧耶。何為乎。其不鳴其善鳴者也。唐之有天下。陳子昂、蘇源明、元結、李白、杜甫、李觀。皆以其所能鳴。其存而在下者。孟郊、東野。始以其詩鳴。其高出魏晉。不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏矣。從吾游者。

李翱、張籍。其尤也。三子者之鳴。信善鳴矣。抑不知天將和其聲。而使鳴國家之盛邪。抑將窮餓其身。思愁其心腸。而使自鳴其不幸邪。三子者之命。則懸於天矣。其在上也。奚以喜。其在下也。奚以悲。東野之役於江南也。有若不一釋然者。故吾道其命於天者。以解之。(以上開係發行)

登登泛卷記

賴山陽

登登行莽倦於行。改行爲泛。(泛一字是九關係統括)自長崎。僦舟泛海而歸於備。終遊寓京攝。號曰泛卷。客聞而笑之。曰。柱於地而屋之者。卷也。名之曰行。斯以異矣。名之曰泛。不亦異之甚乎。且其自肥之備。自備之攝。之京。所乘而泛。皆僦於人者。不得自占爲莽。尚

可自名之乎。故莽則不泛。泛則不莽。二者無一可也。山陽子曰。子何尤焉。子徒見彼剡木剡木者。謂之泛耳。殊不知有家有國者。忽與忽廢。忽沈忽浮。孰非泛者。四嶽三塗。陽城大室。譬之江海。其不一姓者。不猶舟乎。故皇王帝霸之業。自坤輿視之。皆泛也。九州之外。如九州者。九而大瀛海。環之。則雖坤輿亦泛也。而何尤於莽哉。呂氏之書。謂泥古而不通。今者。為刻舟求遺劍。故世之推移。猶舟之行。而人更主之。猶行旅。儼舟也。而自名曰秦。曰漢。曰魏。曰晉。曰唐宋元明。登登子何猶不得自名焉哉。昔者張志和。敝漏其舟。而不能自脩理。曰願為浮家泛宅。往來苕雪間。是志和未免有物我之念爾。

吾試與子升伏水之壚。以望浪速之津。如瓜之皮者。如鴨之翮者。如葉浮者。如胡蝶之蜚于堊者。如林木蠹者。皆登登子之泛莽也。興至則乘。何不可往。又何不可來。而又何敝漏之患。使志和目之。其必神竭而意沮。自愧其泛之不廣也。庸距病於子之強邪。客莫以答。遂書其言。以為泛卷記。（以上之字は錯綜的に關係敷衍を示す。）

原儒

安積良齋

嗚呼。宇宙安適而非儒者之道乎哉。五帝帝而儒。三王王而儒。伊傅周召臣而儒。孔孟亦儒。老莊亦儒。瞿曇亦儒。管商申韓百家九流。莫非儒也。嗚呼。宇宙安適而非儒者之道乎哉。儒者之道。莫自而

出、非、出、乎、天、地、也、邪。天、穹、然、覆、乎、上、地、隕、然、載、乎、下。陰、陽、之、氣、網、緼、交、錯、化、生、萬、物。人、乃、萬、物、之、靈、天、地、之、心、而、道、斯、具、焉。其、大、要、五、曰、父、子、也、君、臣、也、夫、婦、也、長、幼、也、朋、友、之、交、也。斯、道、也、非、堯、舜、禹、湯、文、武、所、得、而、作、也。非、周、公、孔、子、孟、軻、所、得、而、私、也。天、地、之、道、也。四、海、萬、國、之、所、共、有、也。惟、震、旦、疆、場、最、大、人、民、最、稠、而、羣、聖、人、出、焉。故、能、先、萬、國、而、明、爾。堯、舜、三、代、之、上、斯、道、粹、然、出、乎、一。故、風、俗、淳、而、天、下、平、矣。堯、舜、三、代、之、下、乃、始、四、分、五、裂。而、為、老、莊、為、管、商、為、申、韓、羣、起、角、立、相、為、雄、長、而、天、下、洶、洶、然、不、知、所、適、從、矣。然、而、皆、有、父、子、焉、有、君、子、焉、有、夫、婦、焉、有、長、幼、焉、有、朋、友、焉。其、學、亦、講、脩、已

治、人、之、道、未、有、顯、然、以、篡、弑、立、教、者、也。若、瞿、曇、則、雖、無、君、臣、父、子、夫、婦、之、倫、亦、有、長、幼、焉、有、朋、友、焉、其、教、莫、非、勸、善、而、懲、惡、也。夫、脩、已、治、人、勸、善、懲、惡、非、儒、者、之、道、而、何。設、使、此、數、子、立、於、天、地、之、外、夏、不、葛、冬、不、裘、不、食、五、穀、而、絕、滅、人、倫、則、誠、非、儒、者、之、道、也。苟、戴、天、履、地、夏、葛、而、冬、裘、食、五、穀、而、不、離、乎、人、倫、莫、非、儒、者、之、道、也。等、而、上、之、自、士、而、大、夫、而、卿、而、公、以、至、於、天、子、遞、而、下、之、自、士、而、農、而、工、以、至、於、商、凡、立、乎、兩、間、而、不、離、乎、人、倫、者、孰、非、儒、者、之、道。推、而、行、之、草、木、果、蔬、鳥、獸、魚、鼈、之、屬、涵、育、蕃、息、總、總、林、林、又、孰、非、儒、者、之、道、邪。儒、者、之、道、徹、上、下、亘、古、今、放、乎、四、海、而、皆、準、可、以、盡、人、之、性。

可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>盡<sub>二</sub>物<sub>一</sub>之<sub>レ</sub>性。可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>贊<sub>二</sub>天<sub>地</sub>之<sub>レ</sub>化育<sub>一</sub>矣。百姓日用  
 焉而不知習焉而不察。哀哉。彼老莊瞿曇管商之  
 徒。皆賢者不幸而不遇堯舜三代之盛。故或過或  
 不及。偏陂駁雜。不能適<sub>二</sub>於大<sub>中</sub>至<sub>正</sub>之<sub>レ</sub>理。尤更可  
 哀矣。然不可謂<sub>二</sub>之非<sub>レ</sub>道也。嗚呼。宇宙安適而非<sub>レ</sub>儒  
 者<sub>一</sub>之道乎哉。然則我通<sub>二</sub>老<sub>佛</sub>管<sub>商</sub>為<sub>二</sub>儒<sub>一</sub>。彼亦以我  
 為<sub>二</sub>老<sub>佛</sub>為<sub>二</sub>管<sub>商</sub>可<sub>レ</sub>乎。曰。奚可。大<sub>可</sub>以<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>小。小<sub>不</sub>  
 可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>大。昭景屈楚之支族也。指昭氏而曰楚。可  
 也。指楚而曰昭氏。可乎哉。堯舜禹湯文武周公孔  
 子。儒之大中至正者也。老佛管商申韓。儒之舛駁  
 者也。荒唐者也。慘澹者也。以上天地間の萬物を一團とな  
 て、錯綜的に關係統括をなす。これ關係統括の變例を示す。

(二) 純正敷衍

純正敷衍とは純正統括によりて組立てられたる思想。若くはその他  
 の思想につきこを分析しても敷衍するものをいふ。更に覆説すれば、  
 或る事物の種類に限りて、その上層ある部中につき中層ある類を分  
 析し、中層なる類中につき下層ある種を分析するものこれなり。  
 この純正敷衍に於ける理法の發達したる邦土は、隨てその思想も秩  
 序的に進みゆきて、遂に真正なる學理の旺盛を見るに至るべし。又こ  
 れにあらざれば到底精微なる思想を組立つる能はさるべし。かの歐  
 米の學理に深奥ある、亦この理法の早く發達したりしによれるある  
 べし。

徒然草

吉田 無好

人の才能は(以上純)文明かにして、聖の教を知れるを第一とす。次

には手かく事。旨とする事はなくともこれを習ふべし。學問に便  
 あらんだめなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝の  
 つとめも醫にあらすはあるべからず。次に弓射、馬に乗ること、六  
 藝に出せり、必これを窺ふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあ  
 るべからず。これを學ばんをば、いたづらなる人といふべからず。  
 次に食は人の天あり、よく味を調へ知れる人、大なる徳とすべし。  
 次に細工よりづに要多し。この外の事ども、多能は君子のはづる  
 ところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは幽玄の道、君臣これ  
 を重くすとはいへども、今の世には、これをもちて世を治むる事、  
 漸く愚あるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざ  
 るがごとし。』(以上純  
 正敷行)

存乎人者章

孟

子

存乎人者、莫良於眸子。』(以上純  
 正統括) 眸子不能掩其惡。  
 胸中正則眸子瞭焉。胸中不正則眸子眊焉。聽其  
 言也、觀其眸子、人焉廋哉。』(以上純  
 正敷行)

象玄

老

子

有物混成、先天地生。寂兮寥兮、獨立而不改、周行  
 而不殆、可以為天下母。』(以上純  
 正統括) 吾不知其名、字之  
 曰道。強為之名曰大。大曰逝、逝曰遠、遠曰反。故道  
 大、天大、地大、王亦大。域中有四大、而王居其一焉。  
(以上純  
 正敷行) 人法地、地法天、天法道、道法自然。』(以上純  
 正統括)

第二節 主想位置法

主想の位置とは主想をは文字の上に排列すへき場處、即ちそが居わ  
 る所の位をいふ。

こを分ちて前提格、後掲格の二とす。

第一 前提格

前提格とは文の起首若くはその中間に於て統括的に表彰せられたる思想を掲げ置き、後段に於て敷衍的に表彰せられたる思想をもて之れを確實にするものをいふ。更に覆説すれば當初に統括的の思想を掲げて、後に比較と考察とによりて組立てられたる敷衍的思想につきこを解説してもてゆき、その主想を明晰ならしむる法これあり。そもこは演繹的論理の理法に基きたるものにて、初めに全般の理法、即ち汎想を掲げて、後に或る特殊の事情、即ち特想を擧ぐるもこの法によれるものとす。されば普通に知られざる思想はこの法によりて主想の位置を定むるをよしとす。そは讀者に向うて第一着にそが全體の有様を知領せしめたる後にその局部をば一一示さんにはそが理

解力をして大いに容易ならしむるものあればあり。

この法によりて主想の位置を定めたる文には

字母……………●●●●

字眼……………◎◎◎◎

文線……………／＼／＼

等の法則あり。字母は全篇の文章を産み出すべき緊要なる文字、又字眼は全篇の主想を代表すべき文字にて、何れも統括的の表彰に基きたるものなりとす。文線とは當初に於て統括的に表彰したる主想の局部をば属想の中に時々微露せしめたるものをいふ。これ等はもと修辭學上の法則なれども、序よければこゝに説き出でつ。

亦又記一節

鴨 長 明

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば牛馬七珍もよし

なく、宮殿樓閣も望なし。今さびしき住居、一間の菴、みづからこれを愛す。おのづから都に出で、は、乞食となれることをはづといへども、かへりてこゝに居るときは、他の俗塵に着することをあはれぬ。』もし人のいへることを疑はゞ、魚鳥のありさまを見よ。魚は水にあかす、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まふして誰かさとらむ。』

送薛存義序

柳子厚

河東薛存義將行。柳子載肉于俎、崇酒于觴。進而送之。江之滸、飲食之、且告曰。凡吏于土者、若知其職乎。蓋民之役、非以役民而已也。凡民之食於土者、出其什一、傭乎吏、使司平於我也。今受其直、怠

其事者、天下皆然。豈惟怠之、又從而盜之。向使傭一夫於家、受若直、怠若事、又盜若貨器、則必甚怒而黜罰之矣。』オモフ以今天下多類此、而民莫敢肆其怒與黜罰、何哉。勢不同也。勢不同、而理同。如吾民、何有達于理者、得不恐而畏乎。存義假令零陵二年矣、蚤作而夜思、勤力而勞心。訟者平、賦者均、老弱無懷、詐暴憎、其為不虛取直也的矣。其知恐而畏也審矣。吾賤且辱、不得與攷績幽明之說。於其往也、故賞以酒肉、而重之以辭。』

第二 後掲格

後掲格とは文の起首若くはその中間に於て敷衍的に表章せられたる思想を挙げ、後段に統括的に表章せられたる思想を掲ぐるをいふ。更



に覆説すれば淺より深に入り細より大に進むが如く、初に属想をも  
て説き去り説き来りて、その思想已に説き盡したる後に、始て統括的  
に表彰したる主想を掲げ出すものこれなり。

こは歸納的論理の理法に基きたるものにて、初めに或る特殊なる事  
實即ち特想を掲げ来りて、後に全般の理法即ち汎想を推斷するもの  
もこれによれるなるへし。されば普通に知られたる主想の如きはこ  
の法によりてその位置を定むるを要す。何となれば誰も知りつる理  
法を最初に掲げたらんには、讀者は後段を讀むに及はすして直に厭  
倦の念を起しめて、その巻を掩はんとする恐あるものとす。さるにこ  
の法によれば當初には關係敷衍を應用して意外なる思想を掲ぐるこ  
とを得へきものあれば、讀者も知らず識らず全文を讀み終りて、遂に  
その主たる普通の主想も前段に斬新の属想を掲げたるがために全く

幾多の活氣を添へ来りて大なる強烈の感動を引起すことあればな  
り、これ即ち陳を化して新と爲し腐を轉して鮮と爲すものあるべし。  
この法によりて主想の位置を定めたる文には

點晴……………  
●●●

埋線……………  
▲▲▲

といへる法則あり。點晴とは前提格に於ける字母と均しき理法にて、  
全篇の文章を統括したる緊要の文字を文の結尾に點出したるものを  
いひ。埋線とは前提格に於ける文線と類似したるものおれとも、彼は  
文字の表面に顯はれたるものにて、こは文字の裏面に埋伏して外に  
顯はれざるものをいふ。この二法も修辭學上の法則ありとす。

徒然草一節

吉田無好

賤しげなるものゐたるあたりに、調度の多き、硯に筆の多き、持

佛堂に佛の多き、前裁に石草木の多き、家のうちに子孫の多き、人にあひて詞の多き、願文もんに作善さぜんおほく書き載せたる。』おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵家の塵。』

同

御國ゆづりの節會行はれて、劔璽、内侍所、渡し奉らるゝほどこそ限あり心ばそけれ。』新院のかりあさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。

殿守の、とものみやづこ、よそにして、

はらはぬ庭に、花をちりしく、

今の世のことしげきにまされて、院には参る人もなきぞ、さびしき。』かゝる折にぞ人の心もあらはれぬべき。』

託其妻子章

孟

子

孟子謂齊宣王曰。王之臣有託其妻子於其友而之楚遊者。比其反也。則凍餒其妻子。則如之何。王曰。棄之。曰。士師不能治士。則如之何。王曰。已之。曰。四境之內不治。則如之何。王顧左右而言他。』

過秦論

賈

誼

秦孝公據殽函之固、擁雍州之地。君臣固守、以窺周室。有下席卷天下、包舉宇內、囊括四海之意、并吞八荒之心。當是時、商君佐之內、立法度、務耕織、修守戰之具、外連衡而闘諸侯。於是秦人拱手而取西河之外。孝公既沒、惠文、武、昭、襄、蒙、故業、因遺策、南兼漢中、西舉巴蜀、東割膏腴之地、北取要害之郡。諸侯恐懼、會盟而謀弱秦、不愛珍器重寶肥美

之地，以致天下之士，合從締交，相與為一。當是時，齊有孟嘗，趙有平原，楚有春申，魏有信陵。此四君者，皆明智而忠信，寬厚而愛人，尊賢而重士，約從離衡，并韓魏燕趙齊楚宋衛中山之衆，於是六國之士，有寧越、徐尚、蘇秦、杜赫之屬，為之謀。齊明、周最、陳軫、召滑、樓緩、翟景、蘇厲、樂毅之徒，通其意。吳起、孫臏、帶佗、兒良、王廖、田忌、廉頗、趙奢之朋，為其兵，嘗以什倍之地，百萬之衆，叩關而攻秦。秦人聞關而延敵，九國之士，逡巡遁逃，而不敢進。秦無亡矢遺鏃之費，而天下諸侯已困矣。於是從散約解，爭割地而賂秦。秦有餘力，而制其弊，追亡逐北，伏屍百萬，流血漂櫓。因利乘便，宰割天下，分裂河山。

強國請伏，弱國入朝。施及孝文王、莊襄王，享國日淺，國家無事。及至始皇，奮六世之餘烈，振長策而御宇內，吞二周而亡諸侯，履至尊而制六合，執敲朴以鞭笞天下，威振四海。南取百粵之地，以為桂林象郡。百粵之君，俛首係頸，委命下吏。乃使蒙恬北築長城而守藩籬，却匈奴七百餘里，胡人不敢南下而牧馬，士不敢彎弓而報怨。於是廢先王之道，燔百家之言，以愚黔首。墮名城，殺豪俊，收天下之兵，聚之咸陽，銷鋒鏃，鑄以為金人十二，以弱天下之民。然後踐華為城，因河為池，據億丈之城，臨不測之谿，以為固。良將勁弩，守要害之處；信臣精卒，陳利兵而誰何。天下已定，始皇之心，自以為關

中之固、金城千里、子孫帝王萬世之業也。始皇既沒、餘威震於殊俗。然而陳涉、甕牖繩樞之子、氓隸之人、而遷徙之徒也。材能不及中庸、非有仲尼墨翟之賢、陶朱猗頓之富、躡足行伍之間、而崛起阡陌之中。率罷散之卒、將數百之衆、而轉攻秦。斬木爲兵、揭竿爲旗。天下雲集響應、羸糧而景從。山東豪俊、遂竝起、而亡秦族矣。且夫天下非小弱也。雍州之地、崤函之固、自若也。陳涉之位、不尊於齊楚、燕趙韓魏、宋衛中山之君也。鉏耰棘矜、不銛於鉞戟長鎩也。適戍之衆、非抗於九國之師也。深謀遠慮、行軍用兵之道、非及曩時之士也。然而成敗異變、功業相反也。試使山東之國、與陳涉、度長絜大、

比權量力、則不可同年而語矣。然秦以區區之地、致萬乘之權、招八州、而朝同列、百有餘年矣。然後以六合爲家、崤函爲宮。一夫作難、而七廟隕、身死人手、爲天下笑者、何也。仁義不施、而攻守之勢異也。」

第三節 主想排列法

主想排列法とは、主想の居あるべき場處に於てこれを排列する方法をいふ。これを排列する方法の如何によりて、讀者に感動を與ふる程度も各相異なる所あれば、注意せざるべからず。これを分ちて、聚排格、散排格の二とす。

第一 聚排格

聚排格とは、全篇の主想を聚めて一團とあしめて、之れを排列するを

いふ。更に覆説すれば、全篇の主想を聚めて一團とあしたるものを一箇の場處、あるは數箇の場處に於て、これを排列するものこれあり。而してこは統括的に組立てたる思想に用うべきものとす。又後掲格に於ける位置に居ありたる主想の總ては、固よりこの格によりて排列せらるべきは更に言はず。前提格に於ける位置に居ありたる主想の或る一部も、又この格によるべきものとす。さて文章の全篇、皆この法を用ゐたるものあり。あるは文章の局部、即ち或る場處に限りたる主想の排列にのみこを用ゐたるものあり。その文例は散排格にて説くかた、便よければこゝには省きつ。

第二 散排格

散排格とは、全篇の主想を分割して數片とあしめてこれを各處に排列するをいふ。こは多くは數行的に組立てたる思想に用うべきものとす。されど各處に排列すといへることは聚排格に於ても、その一團の主想を各處に排列することあれば、互にそれと混同すべからず。故にこの格に於ける各處の排列は、分割して數片とあしたる主想に限るものと知るべし。

前提格に於ける位置に居ありたる主想の或る一部に限りこの法によりて排列せらるべきものにて、他の一部は聚排格による者とす。今聚排格と散排格との二法を用ゐたる文例を引かんとす。例へは論語の中に、

子曰。父母之年、不可不知也。

の前段ある不可不知也といふ一句は聚排格によれるものにて、その後段に

一則以喜、一則以懼。

といへるが如きは前段の知といふ一字を分割して喜と懼との二意を二ヶ處に排列したるものなればこは散排格によれるものとす。こゝに一言の注意すべきあり。そはここの兩格が第一節の統括若くは敷行と互に混同しても何れか不必要にはあらざるかといふ疑あることと是れあり。蓋この兩格と統括若くは敷行と互に氣脈を連絡したるものあることは前已に之れを説きたれば兩者互に同一あるところ固よりこれあるべし。されどかの統括若くは敷行は専ら思想の組立に關したる法則なれとも、こはその既に組立てられたる思想をば文章の上に排列する所の方法なればとの間に大なる區別ありて兩者とも必要なる所ありとす。

神器 神皇正統記

北 島 親 房

鏡は一物を貯へず私の心なくして萬象を照すに、是非善惡の姿

顯はれずといふ事あり。其の姿に隨ひて感應するを徳とす。是正直の本源あり。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源あり。劍は剛利決斷を徳とす。智惠の本源あり。(以上散排格)此三徳を翕せ受けずしては、天下の治まらん事、誠に難かるべし。(以上聚排格上下節略)

書箕子廟碑陰

柳 子 厚

凡大人之道有三。一曰正蒙難。二曰法授聖。三曰化及民。(以上聚排格)殷有仁人曰箕子。寶具茲道。以立於世。故孔子述六經之旨。尤殷勤焉。當紂之時。大道悖亂。天威之動。不能或聖人之言。無所用。進死以併命。誠仁矣。無益吾祀。故不為。委身以存祀。誠仁矣。與亡吾國。故不忍。且是二道有行之者矣。是用保其明哲。與之俯仰。晦是暮範。辱於囚奴。昏而無

邪。墮而不息。故在易曰：箕子之明夷，正蒙難也。及天命既沒，生人以正。乃出大法，用為聖師。周人得以序彝倫而立大典。故在書曰：以箕子歸，作洪範。法授聖也。及封朝鮮，推道訓俗，惟德無陋，惟人無遠。用廣殷祀，俾夷為華，化及民也。（以上散排格）率是大道，聚於厥躬，天地變化，我得其正，其大人歟。（以下節略）

後出師表

諸葛亮

先帝慮漢賊不兩立，王業不偏安，故託臣以討賊也。以先帝之明，量臣之才，故知臣伐賊，才弱敵強也。然不伐賊，王業亦亡。惟坐而待亡，孰與伐之。是故託臣而弗疑也。臣受命之日，寢不安席，食不甘味，思惟北征，宜先入南。故五月渡瀘，深入不毛，并

日而食，臣非不自惜也。顧王業不可偏安於蜀都，故冒危難，以奉先帝之遺意。而議者謂為非計。今賊適疲於西，又務於東，兵法乘勞，此進趨之時也。謹陳其事如左。高帝明並日月，謀臣淵深，然涉險被創，危然後安。今陛下未及高帝，謀臣不如良平，而欲以長策取勝，坐定天下，此臣之未解一也。劉繇王朗各據州郡，論安言計，動引聖人，羣疑滿腹，眾難塞胸。今歲不戰，明年不征，使孫策坐大，遂并江東。此臣之未解二也。曹操智計殊絕於人，其用兵也，騁孫吳，然困於南陽，險於烏巢，危於祁連，偏於黎陽，幾敗北山，殆死潼關，然後偽定一時。爾况臣才弱，欲以不危而定之，此臣之未解三也。曹

操五攻昌霸不下、四越巢湖不成。任用李服而李服圖之、委任夏侯而夏侯敗亡。先帝每稱操為能、猶有此失。况臣鶩下、何能必勝。此臣之未解四也。自臣到漢中、中間暮年耳。然喪趙雲、陽群、馬玉、閻芝、丁立、白壽、劉郃、鄧銅等、及曲長屯將七十餘人、突將無前、賔叟青羌、散騎武騎一千餘人。此皆數十年之內所糾合四方之精銳、非一州之所有。若復數年、則損三分之二也。當何以圖敵。此臣之未解五也。今民窮兵疲、而事不可息。事不可息、則往與行、勞費正等、而不及早圖之。欲以一州之地、與賊持久。此臣之未解六也。以上一段是散排格夫難平者事也。昔先帝敗軍於楚、當此之時、曾操拊手謂天下已

定。然後先帝東連吳越、西取巴蜀、舉兵北征、夏侯授首。此操之失計、而漢事將成也。然後吳更違盟、關羽毀敗、猇歸蹉跌、曹丕稱帝。凡事如是、難可逆料。臣鞠躬盡力、死而後已。至於成敗利鈍、非臣之明所能逆覩也。これは全篇皆散排格にされるものとす

第四節 客想撰定法

客想撰定法とは主想に附屬してを明晰にし確實にすべき客想を撰定してその目的を十分からしむるものをいふ。これを撰定せんとするには客想といふものゝ如何なる方法によりて組立てらるゝかを知らざるべからず。蓋客想は第一節に説明したる敷衍の理法に基くものにて、こゝにはそが組立の方法を説くものとす。今こを分ちて三とす。分解格、比較格、接近格これあり。



第一 分解格

分解格とは、主想即ち統括的に表彰したる思想を分解して、その中に含有せられたる性質、屬性、若くは動作等を見はしめて主想を明確ならしむるをいふ。これを分ちて釋義、區分の二とす。

(一) 釋義

釋義とは統括ある思想の資料の全部につき一定の釋義を下してその意味を確實ならしむるをいふ。これを分ちて正釋、換釋、混喩の三とす。

これ等の區別は論理學上の理法に於ては誤謬として取らざるものもあるべけれども、文章の組立上より見れば正當なるものありとす。いかんと思へば論理は専ら思想の如何を吟味するものあれば思想の上にも飽くまでも嚴重なる規律を設けざれば到底眞確の思想を得ること

難かるべし。されど文章は文章の上に見はしたる思想をば讀者におもしろく感取せしめ、又明晰に認識せしむることを目的とするものあるがゆゑに、場合によりては一時の便宜上より他の意想外なる思想を假り来りて主想を釋義するとの必要もあるべしと思へばあり。例へば愚物とは馬鹿者を云ふといへることは漠然たる釋義にて論理學上正當の釋義とはいふべからず。されどこれも馬鹿者といへることをのみ知りて、未だ愚物といふことの如何なるものあるかを知らざる者に向うてはこれにて釋義の目的を達することを得べきものとす。されば論理と文章とは或る部分までは互に契合したる所あれども、又一方には各その格別の理法を有したるものあれば決してこれを混同することおさきを要す。たゞこゝに注意すべきことあり。そは文章も均しく思想を主とするものあれば、論理に於ける誤謬は多く曖

昧の思想を避けんとするに出でたる者あるがゆゑに文章の上にて  
も論理上にて誤謬とする所、即ち正釋を除く外、他の方法は注意に注  
意を加へて、讀者に疑惑を起さしめざるやう使用せざるへからず。さ  
れは、一たび正釋にて釋義したる不足の處をば他の方法をもて補ふこ  
と、すれば完全なる表彰となることを得べきあり。  
(い)正釋……とは統括的なる思想の全部を正しく分析し叙列しもて、主想  
を釋くをいふ。さればこの正釋は純正敷行の理法をもて分析するも  
のとす。これを正當の釋義ありとす。

「に」と「へ」との別

富士谷御杖

もと「に」は處をすゑて指す心あり。「へ」文字は方角をたて、指す  
心あり。されば僧正遍昭がもと「に」とは、その遍昭が在處を指し  
たるなり。奈良「へ」とは、遍昭が在處の方角を指せるなり。(上下  
節略)

假名世説一章

太田南畝

三宅石菴の學問は、俗間に鶴學問といへり。其の言にいはいはく、頭は  
朱子、尾は陽明、其の鳴聲仁齋にまに似たり、象山のあたりをかけたま  
はると、香川太沖の語あり。

春波樓筆記一章

司馬江漢

聖人釋迦の教を一口に云へば、夫人間は今日活きて居る中、仁義  
禮智信の教を設けて、生涯の間能く守れとの教あり。釋迦は人  
間一生は少の夢の如し、故に僅なる夢中を安心せよと云ふ教を  
り。

三才説

寥柴舟

才者、裁也。以下其能裁成萬物而輔天地之所不及  
也。(上下節略)

大學注解

朱

子

明德者人之所得乎天而虛靈不昧以具衆理而應萬事者也。但爲氣稟所拘人欲所蔽則有時而昏。然其本體之明則有未嘗息者。(上下節略)

公孫衍張俄章一節

孟

子

居天下之廣居立天下之正位行天下之大道得志與民由之不得志獨行其道富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈此之謂大丈夫。(上節略)

解老一節

韓

非

子

仁者謂其中心欣然愛人也。其喜人之有禍而惡人之有禍也。生心之所不能已也。非求其報也。故曰上仁爲之而無以爲也。

七儒解

宋

景

漁

威以制之術以發之。才以駕之。強以勝之。和以誘之。信以結之。夫是之謂游俠之儒。上自羲軒下迄近代。載籍之繁。浩如烟海。莫不賴其玄籍。嚆其芳腴。搜其闕逸。略其渣滓。約其枝蔓。引觚吐辭。頃刻萬言。而不之止。夫是之謂文史之儒。三才以之混也。萬物以之齊也。名理以之假也。塗轍以之寓也。雖有智者莫測其所存。夫是之謂曠達之儒。沈鬱寡言。逆料事機。翼然凝然。規然幽然。漆漆然。逮逮然。察察然。獵獵然。千變萬化。不可窺度。夫是之謂智數之儒。業擅專門。伐異黨同。以言求句。以句求章。以章求意。無高而弗窮。無遠而弗即。無微而弗

探、無<sub>レ</sub>帶<sub>レ</sub>而弗<sub>レ</sub>宣、無<sub>レ</sub>幽<sub>レ</sub>而弗<sub>レ</sub>燭。夫是之謂<sub>二</sub>章句之儒<sub>一</sub>。謀<sub>レ</sub>事則<sub>レ</sub>鄉<sub>レ</sub>方略。馭<sub>レ</sub>師則<sub>レ</sub>審<sub>レ</sub>勞佚。使<sub>レ</sub>民則<sub>レ</sub>謹<sub>レ</sub>蓄積。治<sub>レ</sub>國則<sub>レ</sub>嚴<sub>レ</sub>政令。服<sub>レ</sub>衆則<sub>レ</sub>信<sub>レ</sub>刑賞。務<sub>レ</sub>使<sub>レ</sub>澤<sub>レ</sub>布<sub>レ</sub>當時<sub>レ</sub>烈<sub>レ</sub>垂<sub>レ</sub>後<sub>レ</sub>世。夫是之謂<sub>二</sub>事功之儒<sub>一</sub>。備<sub>レ</sub>陰陽之和<sub>レ</sub>而不知<sub>レ</sub>其純<sub>レ</sub>焉。涵<sub>レ</sub>鬼神之秘<sub>レ</sub>而不知<sub>レ</sub>其深<sub>レ</sub>焉。達<sub>レ</sub>萬物之理<sub>レ</sub>而不知<sub>レ</sub>其遠<sub>レ</sub>焉。言<sub>レ</sub>足以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>足以<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>表<sub>レ</sub>而人莫<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>而名<sub>レ</sub>焉。夫是之謂<sub>二</sub>道德之儒<sub>一</sub>。(節略)

(ろ) 換釋……とは異名同實ある名詞、若くは統括的思想をくり返へして解釋の用に供するをいふ。更に復説すれば一時の便宜を計りて互にその名稱のみを換へもて主想を明瞭ならしむるものこれなり。されば釋義せらるゝ思想も、釋義する思想も、共に一の名詞、若くは統括的思想ならさるへからず。

獨語一節

漢土にて俳優といふは、今我か國の狂言師あり。(節略)

太宰春臺

南留別志一節

談議といふは、今いふ講釋あり。(節略)

物徂徠

全

喚子鳥は、子を喚ぶ鳥あり。(以下節略)

梧窓漫筆一節

恭儉の二字は、聖徳の本あり。(上下節略)

太田錦城

喻老一節

賞罰者、邦之利器也。(上下節略)

韓非子

論語注解

君子成徳之名。(上下節略)

朱子

園池章 鹽鐵篇

禮。義。者。國。之。基。也。而。權。利。者。政。之。殘。也。(上下 節略)

仁也者章 孟子

仁也者人也。合而言之道也。(上下 節略)

鄉飲酒義 禮記

東方者春。春之爲言蠢也。(上下 節略)

道德 文中子

夫信君子之言也。(上下 節略)

吾道一貫章 論語

子曰。參乎。吾道一以貫之。曾子曰。唯。子出門人問

曰。何謂也。曾子曰。夫子之道。忠恕而已矣。

(は混喩……とは比喩的思想を假りて釋義の用に供しめて主想を明

瞭にするものをいふ。この思想を文章の上に表彰するには何れも釋義的、即ち釋義せらるゝ思想と釋義する思想とを具有せざるべからず。然らざれば比較格の類似と混同することあり。

邯鄲 講曲

宮殿樓閣は、たゞ邯鄲の假の宿。(上下 節略)

千手 全

世は、空蟬の唐衣。(上下 節略)

方丈記一節 鴨長明

今一身を分ちて、二の用をおす。手のやつて、足の乗物、よくわか心にかなへり。(上下 節略)

自暴者章 孟子

仁人之安宅也。義人之正路也。(上下 節略)

諭老章一節 韓非子  
勢重者人君之淵也。君人者勢重於人臣之間。失則不可復得也。簡公失之於田成。晉公失之於六卿。而國亡身死。(上下 節略)

春夜宴桃李園序

李泰伯

夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。(上下 節略)

(二) 區分

區分とは統括的なる思想に於ける範圍の各部を分割して順序正しく叙列しても主想を明確ならしむるものをいふ。更に覆説すれば上層ある類の一部をば細かに區分して下層ある種とあすものを區分といへり。これ純正敷衍の理法に基くものとす。されどこれは全く科學上の法則によるべきものなれば之れを研究せんことはその學科に譲り

て、こゝにはたゞ文章組立上よりその大要を説かんとす。今これを分ちて兩脚、多脚の二とす。

(一) 兩脚……とは上層ある統括的思想を二様に區分したるものをいふ。この兩脚は互にその類似をもて相對するものあり。背異をもて相對するものあり。例へば佛氏が宗教上の方便を區別して地獄極樂とあしたるは第二例に屬し。孟子が聖人の道を説いて仁義とあしたるは第一例に屬するものとす。

徒然草一節

吉田無好

名に二種あり。行跡と才藝との譽あり。(上下 節略)

太田錦城

梧窓漫筆一節

忍の字、堪忍容忍といへば美德にて。殘忍忒忍といへば惡徳あり。(上下 節略)

規矩方員章

孔子曰、道二。仁與不仁而已矣。(上下略)

碧巖戴翁七十壽序

人之情、皆有樂與不樂。(上下略)

答賈獻

班孟堅

一陰一陽、天地之方。乃文乃質。王道之綱。有同有異。聖哲之常。(上下略)

說卦傳

立天之道曰陰與陽。立地之道曰柔與剛。立人之道曰仁與義。(上下略)

(ろ多脚……とは上層ある統括的思想を三様以上に区分したるものをいふ。こも類似若くは背異の關係をもて區別せられたるものとす。

南留別志一節

物徂徠

知をとよむは、新知識、舊知識、己おとの義あり。(上下略)

徒然草一節

吉田無好

人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に著物、第三に居所あり。(上下略)

全

樂欲する所、一には名あり、名に二種あり、行跡と才藝との譽あり。二には色欲、三には味あり。よろづの願この三には志かず。(上下略)

子之所慎章

論語

子之所慎、齊、戰、疾。

子不語章

全

子不語怪力亂神。

子以四教。文、行、忠、信。

子以四教。文、行、忠、信。

原性

全

韓退之

性之品有上中下三品。上焉者善焉而已矣。中焉者可導而上下也。下焉者惡焉而已矣。其所以爲性者五。曰仁、曰禮、曰信、曰義、曰智。(上下節略)

第二 比較格

比較格とは主想と連結したる點、即ち類似、若くは背異の關係ある者を假り采りて主想を明確ならしむるものをいふ。そも宇宙間の萬有について普通の觀察を下せば何れの點に於てか相互の契合あらざるへき。されど又その各自特別の點に於ては反對若くは差異したる所

あきにあらず。而してこの比較格もかゝる理由によりて起りたるものなるべし。又この格は關係敷衍の理法に基きたるものなるべし。今こを分ちて類似、背異の二とす。

(一) 類似

類似とは主想と類似の關係ある點をもてこを敷衍するものをいふ。この類似の關係とは歴史上の事實に關するあり。あるは古人の格言に關するあり。あるは物象上に關するものあり。下の背異に於ても亦然り。修辭學上の正喻法は多くこの理法に基きたるものとす。この類似と上節に説きし釋義中の混喻と混同する勿れ。蓋この二者に於て思想の資料上より見れば何れも類似の關係より成立ちたるものなるべし。その思想を組立て、之れを文章の上に表彰する方法に於て相異なる所あるものとす。何とあればその資料をば一方



は解釋的に使用し、一方は比較的運用したるものあればあり。又この類似の思想を組立つるには、その屬想をば主想中に混淆せしめたる者あり。例へば土佐日記に、「けふは海あられ、磯に雪ふり。浪の花さけり。」の如きこれあり。されどこれ等は修辭學上の理法に護りて、こゝには省きつ。

父子の歌 新千載集

後三條前内大臣實忠

子を思ふ、涙くらへは、よるの鶴。

われおとらめや、音にたてすとも。」

枕草紙

清少納言

硯に髪の入りにてすられたる。又墨の中に石こもりて、ましくとまじしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらで、外にある。尋ねありく程に、待速に久しきを、平う

ドて待ちうけて、悦びながら加持せざるに、このごろ物祟に困どけるにや、居るまゝに即ちねぶり聲にありたる。いとにくし。」

徒然草一章

吉田無好

雙六の上手といひし人に、その方法を問ひ侍りしかば、勝たんとうつべからず、負けじとうつべきあり。いづれの手がとく負けぬべきと案じて、その手をつかはすして、一目なりとも、遅くまくべき手につくべしといふ。道を知る教、身を修め、國を保たん道も、又志かり。」

惡柴之奪朱章

論語

子曰、惡柴之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家者。」

秦

戰國策

識乎微之爲著者強。察乎息民之爲用者霸。明乎輕之爲重者王。(上略下略)

喻老一節

韓非子

千丈之堤。以螻蟻之穴潰。百尺之室。以突隙之烟焚。(上略下略)

說林一章

全

蟲有蛇者。一身兩口。爭相齧也。遂相食。因自殺。人臣之爭事。而亡其國者。皆蛇類也。

說難一節

全

夫龍之爲蟲也。柔可狎而騎也。然其喉下有逆鱗。徑尺。若人有嬰之者。則必殺人。人主亦有逆鱗。說者能無嬰人主之逆鱗。則幾矣。(上略)

題司馬溫公擊虜圖

齋藤拙堂

公之爭新法。痛擊不遺餘力。公之改弊政。如救焚拯溺。人皆疑其不類平生。余謂天下。一甕之廣也。億兆一兒之多也。熙寧之爭。元祐之政。一擊一拯。之大者也。當兒之未溺。嬉戲樂羣。藹然之狀。可掬。及兒之既溺。振袂攘臂。悍然當之。此其天性也。然則公之仁勇。既於總角之日見之。何必待登台鼎。秉鈞軸而後知之耶。

紙鷲說

野田笛浦

紙鷲非鷲也。而及下。依人手。乘諸順風也。隨而颺。隨而高。翰飛戾天。震雄聲於雲間。方此時。真鷲亦不能過之也。逆風忽起。則細線中斷。骨折肉飛。傾覆。

流、離、而、下。或、落、于、泥、沙。或、困、于、葛、藟。于、髑、腕、忽、而、  
 雲、霄、忽、而、糞、土。其、不、可、測、者、如、此。夫、順、逆、無、定、者、  
 天、上、之、風、也。因、其、無、定、之、風、為、其、身、之、安、危。為、紙、  
 鷲、不、亦、難、乎。蓋、依、人、而、成、事、者、不、得、不、因、人、敗、矣。  
 待、物、而、得、勢、者、不、得、不、因、物、失、矣。今、夫、紙、鷲、身、不、  
 能、自、飛、待、風、以、飛。身、不、能、自、騰、依、人、以、騰。一、上、一、  
 下、一、安、一、危、莫、非、待、風、依、人、也。甚、矣、其、與、權、相、相、  
 肖、也。夫、權、相、之、登、顯、職、致、身、於、青、雲、高、牙、大、纛、叱、  
 咤、風、生、者、是、順、風、之、紙、鷲、也。一、旦、鼎、折、覆、餗、刑、則、  
 繼、之、者、是、逆、風、之、紙、鷲、也。何、其、終、始、懸、絕、一、至、於、  
 斯、乎。抑、彼、之、所、依、者、皆、人、也。亦、不、得、不、因、人、失、也。  
 彼、之、所、待、者、皆、物、也。亦、不、得、不、因、物、敗、也。是、必、然、

之、勢、奚、足、怪、焉。不、見、彼、真、鷲、乎。(真鷲は背異比較なり)雄  
 姿、橫、發、自、得、於、冥、冥。勢、不、可、則、卑、飛、斂、翼、翔、於、  
 林、木、之、間。一、上、一、下、唯、意、是、從。豈、如、彼、紙、鷲、之、依、  
 人、待、風、者、然、哉。不、見、彼、真、人、乎。(真人と權相と比すれば背  
 比較とす)不、依、人、不、待、物。高、而、不、忘、卑、卑、而、不、忘、高。  
 達、則、伸、冲、天、之、志。一、舉、清、四、海。不、達、則、脩、然、斂、迹、  
 優、游、於、環、堵、樂、以、忘、憂。一、屈、一、伸、唯、意、是、從。豈、如、  
 權、相、之、依、人、待、物、者、然、哉。嗚、呼、余、觀、真、人、之、不、異、  
 於、真、鷲、而、有、以、益、信、權、相、之、不、異、於、紙、鷲、矣。紙、鷲、  
 玩、器、也。一、敗、而、可、復、製、也。(紙鷲)一、敗、而、不、可、復、製、  
 者、可、不、畏、歟。(これ權相なり末段權相  
 と紙鷲との背異比較)

賣柑者言

劉 覆 詭

杭有賣柑者。善藏柑。涉寒暑不潰。出之。曝然玉質而金色。置之于市。賈十倍。人爭鬻之。予賀得其一。剖之。如<sup>ナムチ</sup>有煙撲<sup>アキナフ</sup>口鼻。視其中。則乾若敗絮。予怪而問之。曰。若所<sup>ナムチ</sup>市<sup>アキナフ</sup>於人者。將以實<sup>ナムチ</sup>遵<sup>アキナフ</sup>豆奉<sup>ナムチ</sup>祭祀<sup>アキナフ</sup>供<sup>ナムチ</sup>賓客<sup>アキナフ</sup>乎。將<sup>ナムチ</sup>衛<sup>アキナフ</sup>外<sup>アキナフ</sup>以<sup>ナムチ</sup>惑<sup>アキナフ</sup>愚<sup>アキナフ</sup>警<sup>アキナフ</sup>也。甚矣哉。為<sup>ナムチ</sup>欺<sup>アキナフ</sup>也。』賣者笑曰。吾業是有年矣。吾業<sup>スレ</sup>賴<sup>スレ</sup>是以<sup>スレ</sup>食<sup>スレ</sup>吾<sup>スレ</sup>軀<sup>スレ</sup>。吾<sup>スレ</sup>售<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>。人<sup>スレ</sup>取<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>。未<sup>スレ</sup>嘗<sup>スレ</sup>有<sup>スレ</sup>言<sup>スレ</sup>。而<sup>スレ</sup>獨<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>足<sup>スレ</sup>。子<sup>スレ</sup>所<sup>スレ</sup>乎<sup>スレ</sup>世<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>為<sup>スレ</sup>欺<sup>スレ</sup>者<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>寡<sup>スレ</sup>矣。而<sup>スレ</sup>獨<sup>スレ</sup>我<sup>スレ</sup>也<sup>スレ</sup>乎。吾<sup>スレ</sup>子<sup>スレ</sup>未<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>思<sup>スレ</sup>也。』今夫佩<sup>スレ</sup>虎<sup>スレ</sup>符<sup>スレ</sup>坐<sup>スレ</sup>臯<sup>スレ</sup>比<sup>スレ</sup>者。洗<sup>スレ</sup>洗<sup>スレ</sup>乎<sup>スレ</sup>干<sup>スレ</sup>城<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>具<sup>スレ</sup>也。果<sup>スレ</sup>能<sup>スレ</sup>授<sup>スレ</sup>孫<sup>スレ</sup>吳<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>略<sup>スレ</sup>耶。峨<sup>スレ</sup>大<sup>スレ</sup>冠<sup>スレ</sup>拖<sup>スレ</sup>長<sup>スレ</sup>紳<sup>スレ</sup>者。昂<sup>スレ</sup>昂<sup>スレ</sup>乎<sup>スレ</sup>廟<sup>スレ</sup>堂<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>器<sup>スレ</sup>也。果<sup>スレ</sup>能<sup>スレ</sup>建<sup>スレ</sup>伊<sup>スレ</sup>臯<sup>スレ</sup>之<sup>スレ</sup>業<sup>スレ</sup>耶。盜<sup>スレ</sup>起<sup>スレ</sup>而<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>知<sup>スレ</sup>禦<sup>スレ</sup>。民<sup>スレ</sup>困<sup>スレ</sup>而<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>知<sup>スレ</sup>救<sup>スレ</sup>。吏<sup>スレ</sup>茲<sup>スレ</sup>而<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>知<sup>スレ</sup>禁<sup>スレ</sup>。法<sup>スレ</sup>斃<sup>スレ</sup>而<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>知<sup>スレ</sup>理<sup>スレ</sup>。坐<sup>スレ</sup>糜<sup>スレ</sup>糜<sup>スレ</sup>粟<sup>スレ</sup>而<sup>スレ</sup>不<sup>スレ</sup>知<sup>スレ</sup>恥<sup>スレ</sup>。觀<sup>スレ</sup>其<sup>スレ</sup>坐<sup>スレ</sup>

高堂、騎大馬、醉醇醴而飲肥鮮者、孰不巍巍乎可畏、赫赫乎可象也。又何往而不金玉其外、敗絮其中也哉。今子是之不察、而以察吾柑。予默然無以應。退而思其言、類東方滑稽之流。豈其憤世疾邪者邪。而托于柑以諷耶。』

(二) 背異

背異とは主想と背反、若くは差異したる點をもて、これを敷衍するものをいふ。修辭學上の反喻法は、多くこの理法に基きたるものあるべし。

こを分ちて背反、差異の二とす。

(い) 背反……とは主想と反對、即ち真反對の關係を有したる思想をもて、これを敷衍したるものをいふ。例へば色相の黑白に於ける、氣象の

晴雨に於けるが如きこれあり。

土佐日記一節

紀貫之

海は荒るれど、心は少しおどぬ。(上下節略)

十六夜日記

阿佛尼

いと白き洲崎に、黒き鳥の羣れ居たるは、鸕鷀といふ鳥あり。(上下節略)

徒然草一章

吉田無好

手のあろき人の、憚らず、文かきちらすはよし。見告しとて、人にかゝするはうるさし。

同

主ある家にはすゞろある人、心のまゝに入りくることおし。主人おき所には、道行人みたりに立ち入り、狐鼻やうの物も、人氣にせかれねば、所え顔に入りすみ、木精をどいふけしからぬ形も現

るゝ物なり。又鏡には色形をかき故に、萬の景采りて映る。鏡に色形あらましかば、映らざらまし。虚空よく物を容る。我等が心に念念の織に采り寄ぶも、心といふものゝなさにやあらん。心に主あらましかば、胸の中に、若干のことは入り采らざらまし。

知足菴記

村田春海

衰世の習はしこそはかおきものはあなれ。高き賤じき品いとことありといへども、おのがむじ、心行くばかりあるは稀にて、惟た足らはぬ事のみぞ多かりける。花をおもふとしては楢の嵐を怨み、月をめぐるとしては尾上の雲を厭ふためし。誰かはのがるべき。林にやどる鸕鷀は僅ある小枝の陰をのみ頼み、流に水求むる鯊はただ腹ふくるゝに過ぎず、こそ古への人もいひつれ。かゝる理をだにわかたば、限りあるこの世に、限りなき事を思ふべきかは。

こゝに中村の主ちんよく塵の世のけがしきをのがれて、萱か軒  
松のとほそに心の月をすましめ。花をつむ夕、あかを汲む曉、御  
佛に仕ふるいとま、ある時は氷を碎き雪を煮て、梅尾の音を志の  
ぶめる業にしも、心をあんなぐさめける。これやこの世に求むべ  
きすぢをも忘れ。又人を羨やむべき節をもおもはで、己が心から  
事足る業にしもあれば、かの古への人のいひけん理にこそかあ  
はめ。いでやうつそみの世の限あさ求めある際とは日を並へて  
論ふべくもあらざりけり。うべあく此すみかをしも足る事を  
志るとは名づけしこと。』

秦

詩云。樹徳莫如滋。除害莫如盡。(上略下)

戰國策

齊

全

祖仁者王。立義者霸。用兵窮者亡。(上略下)

論貴粟

鼂

錯

神農之言曰。有石城十仞。湯池百步。帶甲百萬。而  
亡粟。弗能守也。(上略下)

猫狗說

賴

山

陽

猫捕鼠于内。狗警盜于外。各有其職。以事主者也。  
(事主はこれ類似にて以下凡て背反なりとす)然諺曰。畜猫三歲。三日忘惠。畜  
狗三日。三歲不失。而人常愛猫。而疎狗。何哉。以其  
形體則狗之粗。不若猫之膩也。以其聲音則狗之  
厲。不若猫之嬌也。以其性情則狗之剛。決不若猫  
之善。柔便辟也。是以猫之於主人。不離其左右。出  
入其閤。食有魚。寢有褥。而狗則寢於土。而食於

餒。終。歲。不。得。望。見。主。人。之。面。認。盜。而。失。無。賞。縱。賊。而。不。捕。無。罰。可。悲。也。夫。

明太祖論

川北温山

凡謂學者、豈其膠古之謂乎。參酌前言、鑑觀往行、視時制宜之謂也。事有宜古而不宜今、雖三代制作不能無因革。因革皆得時宜、善繼前人之意、而不泥前人之迹。補其所未為、而不肯承其弊。此之謂善學也。(以上是正釋)湯武善學、堯舜故征伐而治天下。是以不襲展禽之跡者、能為展禽、不倣西施之舉者、為善學。西施彼銖銖求同、寸寸欲均。我知下蹈其覆轍、而不自覺矣。明太祖以布衣起事、不數年而定天下、終始皆以漢高自期。當時李善長、孔克

仁之徒、亦許以漢高。後世無異論。余則曰。明祖非善學。漢高徒倣其舉者矣。何以言之。以其殺功臣也。夫漢高寬仁愛人、其殺功臣、皆出於不得已。如明祖、則猜忌殘忍、其殺功臣、專為身後之計。漢高雖殺功臣、亦能託其孤於功臣、而不疑焉。明祖殺功臣、謂為子孫祛害。漢高殺功臣、猶風雨晦暝、有時而霽、未足累其德。明祖殺功臣、猶夜國之未見日。方寸涇渭、迥異矣。故曰。明祖非善學。漢高徒倣其舉者矣。或曰。明初之政、依仿於漢。吾子以下殺功臣一事、槩棄其餘、豈確論乎。曰。功虧一簣、不得為山。垂成自畫、豈得謂之學哉。明祖非不學。漢高而學、不知其方。故其功烈、亦非可與漢高比而論。

也。而善長克仁之徒云云。不諛則愚矣。嗚呼學之  
 孫天下也大矣。以不善學為學。恐至并廢真學。人  
 君曰。何必學古。宰卿曰。何以學古為。士庶則曰。學  
 古何益。如此而天下不為螭魅者幾希矣。其咎何  
 在。由不善學而已。曰。然則何如謂之善學。漢高曰。  
 善學。漢高者。莫如光武。漢高蒞醴。韓彭而光武保  
 全功臣。漢高好罵詈人。而光武推赤心置人腹中。  
 漢高不貴儒術。而光武臨天下。首建學校。且其恢  
 廓大度。同符乃祖。此之謂善學。甚哉學之難也。今  
 日估畢之徒。開口則曰。我能學古。未知將為明祖  
 耶。抑能為光武耶。此余之所以不輕許人以善學  
 也。』

無齋記

劉大樞

天下之物。無則無憂。而有則足患。人之患。莫大乎  
 有身。而有室家。即次之。今夫無目。何愛於天下之  
 色。無耳。何愛於天下之聲。無鼻。無口。何愛於天下  
 之臭味。無心思。則任天下之理亂。是非得失。吾無  
 與於其間。而吾事畢矣。橫目二足之民。瞽然不知  
 無之足樂。而以有之為貴。有食矣。而又欲其精。有  
 衣矣。而又欲其華。有宮室矣。而又欲其壯麗。明童  
 艷女之侍前。吹竽擊箏之陳於後。而既已有之。則  
 又不足以厭其心志也。有家矣。而又欲有國。有國  
 矣。而又欲有天下。有天下矣。而又欲九夷八蠻之  
 無不賓貢。九夷八蠻無不賓貢矣。則又欲長生久



視歷萬祀而不老。以此推之、人之欲羨於富貴、佚遊而欲其有之也、豈有終窮乎。古之詩人、心知其意。故爲之歌曰、隰有萋楚、猗儺其枝。天之沃沃、樂予之無知。夫不自明其一身之苦而第以萋楚之無知爲樂、其意雖若可悲、而其立言則亦既善矣。余性顓而愚、於外物之可樂、不知其爲樂。而天亦遂若順從其意。凡人世之所有者、我皆不得而有之。上之、不得有馳驅萬里之功。下之、不得有聲色自奉之美。年已五十餘、而未有子息。所有者、惟此身耳。嗚呼、其亦幸而所有之惟此身也。使其於此身之外、而更有所有、則吾之苦、其將何極矣。其亦不幸。猶有此身也、使其併此身而無之、則吾之樂。

其又將何極矣。旅居無事、左圖右史、蕭然而自足。啼饑之聲、不聞於耳。號寒之狀、不接於目。自以爲不知。而因以爲可樂。於是、以無名其齋云。

(ろ) 差異……とは主想と差異、即ち小反對の關係を有したる思想をもて、これを敷衍したるものをいふ。例へば氣象の雨と曇と、又色相の赤と紫との如きこれあり。

徒然草一節

吉田無好

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。蜻蛉の夕を待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。(上下節略)

管仲論

蘇老泉

五伯莫盛於威文。文公之才、不過威公。其臣、又皆不及仲。靈公之虐、不如孝公之寬厚。(以上是) 文公

死諸侯不敢叛晉。晉襲文公餘威，猶得為諸侯之盟主。百餘年。何者，其君雖不肖，而尚有老成人焉。威公之薨也，一敗塗地，無惑也。彼特一管仲而仲則死矣。（以上是）

送殷員外使回鵲序

韓退之

朝之大夫莫不出餞。酒半，右庶子韓愈執盞言曰：殷大夫，今人適數百里，出門惘惘，有離別可憐之色。持被入直三省，丁寧顧婢子，語刺刺不能休。今子使萬里外，國獨無幾微出於言面，豈不真知輕重大丈哉。（上略）

原毀

韓退之

古之君子其責己也重，以周其待人也輕，以約重。

以周故不怠，輕以約，故人樂為善。聞古之人有舜者，其為人也仁義人也。求其所以為舜者，責於己曰：彼人也，予人也。彼能是而我乃不能是。蚤夜以思，去其不如舜者，就其如舜者。聞古之人有周公者，其為人也多材與藝人也。求其所以為周公者，責於己曰：彼人也，予人也。彼能是而我乃不能是。蚤夜以思，去其不如周公者，就其如周公者。舜大聖人也，後世無及焉。周公大聖人也，後世無及焉。是人也，乃曰：不如舜，不如周公，吾之病也。是不亦責於身者重以周乎。其於人也曰：彼人也，能有是，是足為良士矣。能善是，是足為藝人矣。取其一，不責其二，即其新，不究其舊。恐恐然，惟懼其人之不

得爲善之利。一善易備也。一藝易能也。其於人也。乃曰。能有是。是亦足矣。曰。能善是。是亦足矣。是不亦待於人者。輕以約乎。今之君子。則不然。其責人也。詳。其待己也。廉。詳故。人難於爲善。廉故。自取也。少。己未有善。曰。我善是。是亦足矣。己未有能。曰。我能是。是亦足矣。外以欺於人。內以欺於心。未少有得而止矣。是不亦待其身者。己廉乎。其於人也。曰。彼雖能是。其人不足稱也。彼雖善是。其用不足稱也。舉其一。不計其十。究其舊。不圖其新。恐恐然。惟懼其人之有聞也。是不亦責於人者。己詳乎。夫是之謂不。以衆人待其身。而以聖人望於人。吾未見其尊己也。』(以下略)

第三 接近法

接近法とは主たる思想とある事情の關係したるものを互に連結するものをいふ。更に覆説すれば或る特別の事情、即ち場處若くは時間の接近によりて互に連結したる思想を假り来りて主想を敷衍するをいふ。こは特別ある或る一時の事情、即ち時間若くは場處の媒介によりて互に結合したるものあれば、この二要素を除き去るときは何れも連結の縁絶えて互に相隔離すべきものなりとす。

(一) 場處

場處とは主想に於ける場處の接近によりて互にこれを連結したるものをいふ。例へば淺草といへば觀音堂と連結し、晃山といへば晃廟若くは諸瀑布と連結し。又俗語に「伊勢は津で持つ津は伊勢でもつ、尾張

名古屋は城でもつ。」といへる、これ即ち場處の關係を有したるものをもて互に連結せしめたるものあり。司馬選か史記論贊はこの關係をもて主想を引起したるもの多し。頼山陽の外史論贊も亦然りとす。

青木美行が越前へゆくをおくる歌の序

岡部真淵

よくゆきて、よくかへります、よしゆきのぬしな。もとより、其の君に、よくいそしみ。そのおやに、よくまたがひ。書をもよくよみて、よく友にまじらひて、樂をとりて、よく人をやしあひける。ここにことしみを月ばかり。天の原ふじのね(駿河)の東より、志なきかる（如賀）の南まで。ふとの峯の雪の、ゆきのまに、よくゆきて。まら山の志らが、かきたるらん父母のみことをかへり見んとありけり。『海つ道のうど濱は(駿河)船にことふる波もたゝす。山の

みちの伊吹山は(近江)神の息吹の霧もあらせず。三越ぢのたむけよくして、あちの關(越前)とおほる恙なく。よくゆきて、よくかへり見ん日は、老に志あむのくすりもて、よくやしあひ、よくまたがは、白山の志らが、かきたる山(越前)あかへらざらめや。』まかれこそ、こん年の此月は、よくこゝまできたまひなんものと、けふのわかれの盃に、やがて待酒をのまんことをちぎるは。』

楠氏論贊

頼山陽

外史氏曰。余數往采掘橋之間、訪所謂櫻井驛者。得之山崎路一小村耳。過者或不省其爲驛趾。蓋經足利織豐數世故變移、道里驛程、隨輒改耳。余於是低回不能去。顧望金剛山巍立雲際、想見公舉義之秋、及其子孫據以扞護王室也。』(以下略)

予識駒留伯盛移居沼津序 安積良齋  
 酒酣耳熱談辯如雲洵足壯吾黨之氣將徙沼津  
 沼津在富士峯下伯盛舉目即見之請以此論文  
 可乎夫富士千仞削成八面玲瓏為眾嶽之宗文  
 之骨格宜如是也否則卑矣三峯挿天上有大始  
 之雪下界未曙先受旭光燦如金芙蓉文之風神  
 宜如是也否則陋矣噴雲吐煙曳而為縞帶聚而  
 為樓閣奔而為怒濤散而為摩絮文之變態宜如  
 是也否則套矣至其盤三州亘萬古巍然為大邦  
 巨鎮則以神氣充塞其中也文以氣為主亦當如  
 是否則散以綴矣由此觀之富士則造物者一大

文章而開闔馳騁抑揚頓挫之法皆具焉伯盛仰  
 而觀之俯而思之必有所自得而文之長進沛乎  
 其不可禦也他日從來參文社則人將推為藝林  
 中之芙蓉峯矣吾雖老尚能拭目觀之

竹外二十八字詩序

森田節齋

攝之王詩者曰竹外為人疎放嗜酒酒間快談縱  
 橫有適意輒大呼呼妙蓋奇士也今春余寓京一  
 日有客踵門醉脚跟踏出迎之乃竹外也探懷出  
 似其二十八字詩屬序於余曰子之文長譬喻將  
 何物以品我詩余曰子家瀕江江之風色即可  
 以品子之詩矣余嘗僦航上下江者數矣方其上  
 江也萬家點燈之初舟子解纜既過數橋兩岸空

澗。月上。東方。水。心。碎。金。可。掬。不。可。捉。而。雨。後。下。江。則。有。更。奇。焉。者。船。發。伏。見。未。數。里。回。顧。此。處。此。良。諸。峯。出。沒。隱。見。於。煙。雲。香。靄。中。至。山。崎。八。嶂。之。際。天。王。山。與。丈。夫。山。此。然。對。峙。翠。色。欲。滴。既。而。夕。陽。西。沒。遠。寺。疎。鐘。乍。斷。乍。續。亦。足。令。聞。者。發。深。省。矣。今。讀。子。之。詩。其。透。徹。玲。瓏。有。如。月。上。東。方。水。心。碎。金。者。其。曲。折。變。化。有。如。此。處。此。良。諸。峯。出。沒。隱。見。於。煙。雲。香。靄。中。者。其。雄。峻。巖。整。有。如。天。王。山。與。丈。夫。山。此。然。對。峙。者。而。其。神。韻。縹。渺。似。遠。寺。疎。鐘。乍。斷。乍。續。者。亦。無。不。有。焉。則。子。之。詩。卷。謂。之。一。幅。潑。江。圖。可。也。且。神。韻。縹。渺。透。徹。玲。瓏。者。固。絕。句。之。本色。而。曲。折。變。化。者。如。古。風。雄。峻。巖。整。者。似。律。體。則。

子之詩雖止七絕謂之具諸體亦可也。竹外猷大呼曰。妙。遂書以與之。竹外姓藤井名啓字士開高槻藩士也。

(二) 時間

時間とは主想に於ける時間の接近によりて互にこれを連結したるものをいふ。例へば明治二十三年といへば帝國議會と連結し、夏季といへば悪役の流行とも、避暑の旅行とも連結するは、互に時間の關係を有したればあり。

又この時間には第二章にて説明したる追憶、若くは假設といふ思想と密着の關係を有したるものあり。そはこの時間か過去の事實に於ては追憶となり、未來に於ては假設とあるものあればあり。

迷憶といふ題にて

本居宣長

昨日は、(是れ) 主想 今日の昔ふて。(是れ家想)  
(以下節略)

二月ばかり山里の梅をめぐる記 村田春海

大伴の宿禰の主、今は塵の世のけがましを逃れ、其の遠祖ある筑紫のみこともちの古へを忍ひいで、百千の梅を砌もぢ根ぞし移し、そをもて清き心の友とをんあしける。こゝに吾思ふ友がき相伴ひつゝ、其の花の盛りをも過ぎ、世の外の春をもみんとてふりはへて訪ふ事あり。『頃はささらぎの十日餘りなるに、彼のみゆる岡邊の雪は猶消残りながら、打霞む森の梢どもは、春の光みち渡りて、そこはかとなく聞ゆる鶯の聲も、人來と厭ふにはあらで、吾をよぶある心地のすめるは心ゆく夕べあり。所は東の比叡の麓なれば、世離れてかごかに住ひおしたり。松のとほそ萱が軒いとことそぎたるに、おのづからなる竹むらを籬に結ひ渡して、

せき入るゝ水の流潔く、石のたゞすまひ殊更ならずを、して庭の面いと廣らあるに、植添へたる千本の蔭は色に香にとり并べて、露を妬み霞にさほへるけはひ、此世のものとしも覺えずある。斯くて人々感かでくつがへりつゝ、花の下にまとおすれば、主は酒肴とりまかなひ、盃かわらけとりあげて、

梅みにと、とはれもするが、大伴の、

昔おぼゆる、宿あらなくに、

と吟よび出たるを、取あへず一人が

大伴の、名もかぐはしき、宿の梅の、

昔の春を、忘れやはする、

かはらけ、度々廻る程に、月はあやかにさし登りて、木蔭も隈おくみゆるに、吹くとしもあらぬ下風に匂ひみちたるは、夏なつひを勸

むるばかりなるが言ん方なし。人々皆あざれあひて、あるは遣水  
に口そゝぎて「吞ての後は」と歌ひ、或は苔の筵にかりゐて「雪を  
欺くと」口すさび出るあり。又物の音ふきからしたるは花にうし  
ろめたき調の名あるも折にあひたる心々、何れをかしからぬは  
あらざりけり。いでやかく遊びの道の樂しかるも世の羈はたなき人  
こそは、とて主のほこりかあるを、花の心もよか思ふらんとぞ覺  
ゆる。されば今宵の有様をしも今日こぬ友にも語らまし。又後の  
思出ぐさにも、とて月の光りをともし火にてかづく物にかい  
つく。』

題自畫後

頼山陽

倪迂作竹自題有云。我畫竹觀者或以爲蘆荻或  
爲楊柳。今余寫鴉人必不認爲鴉。然夕陽已沒蒼

煙罩林。當此時空際點點何辨羽翼脰毛。』

梅翁遊記三

齋藤拙堂

昏黑還入院。欲俟月升後出觀花也。余平生想溪  
梅月夜之奇。欲一游併之。每歲春有人自伊來者。  
輒詢之花之開謝。與月之虧盈。每齟齬不相合。遲  
之七八年。至於今歲。欲以今月望前來。然以地在  
山中。著花殊晚。其盛開常在春分前數日。而春分  
在。今月之末。如其無月。何。忽思邵康節詩云。看花  
切莫見離披。私謂及半開則可。何待其爛漫。遂以  
望後三日來。豈意花開已七八分。或將十分。實望  
外之喜也。獨奈日已落。黑雲覆天。意味悵悵。張燭  
欲飲。此行購樽容五升者。滿貯酒。命奴負荷。呼取



之酌不數巡而竭。怪詰之。乃知奴醉墜地致傾覆。益悵悵。買村酒得數升。采洗盞更酌。雖甜不適口。亦自醺然。文綜風流士。公圃以詩名海內。而半香善畫山水。餘人亦皆登咏揮灑。少慰愁悶。俄而小奚采報曰。雲破月出矣。衆驚喜欲狂。捨盞走出。時將二更。月色清朗。步抵真福寺。枝枝帶月。玲瓏透徹。影盡橫斜。寶鈿玉釵。錯落滿地。水流其下。鏘然有聲。覺非人境。傍岸西行。前望月瀨。水清如寒玉。漾月影。感作銀鱗。而兩山之花。倒懸其上。隱約可見。一棹中流。山水俱動。吾平生之願。至是酬矣。

下篇 文章

第一章 組立上の四大法

思想ある上篇に於ては、文章を組立てんとする材料の種類、即ち思想上の區別と、又その材料の撰定法、若しくは切組法、即ち思想の表裏とを説明せたり。これ等は總て文章といへる家屋を組立てんとする準備に必要あるものなり。而して組立上に關する準備はこれにて既に論し盡しぬと思へり。故にこの文章ある下篇に於ては、その既に準備し置ける材料をもて、之れを實地に組立て、完全なる文章の家屋を落成せしむる方法を説明するものとす。即ち文章の組立法これなり。

文章の組立法とは思想の紛亂ある者は之れを避けて秩序的に整齊をらしめ、あるはその整然たる者は之れを避けて錯落的に變化せしめ、

もて之れを適當の場處に排置せしむる法則をいふ。更に覆説すれば、論理の法に照し、心理の則に基き、讀者の心意上に明晰なる理會力を引起さしめ、あるは強烈なる感情を附與して、文章表彰上、十分ある目的を達せんとする法則を攻究するものこれあり。

されど余がこゝに組立法として説明せんとするは、修辭法と一大境界を劃したるものにて、これを約言すれば文章の骨格に關する組織ありとす。今文章を以て一の家屋に喩へんに、家屋の間取を定め、木材の良否を擇み、あるはその地盤を測量し之れを堅牢おらしむるを總ての準備より、その素立に至るまでの事はこれ文章組立法の關する所あり。又家屋の大體既に建設せられたる後、屋瓦の目塗、壁面上塗、あるは室内の建具、額面の排列など、すべて家屋の内外に於ける修飾に關したる事は修辭法の主とする所あり。

されば、いかに十分ある修辭法を施さんとするも、その組立上に於て完全をあらさる所あらは、到底その目的を達すること能はざるべし。これ余が文章上に關する理論を公にせんとするに臨み、その第一著として先づ組立法を説く所以ありとす。

その組立上に關したる、最も重要なる法則は左の如し。

第一、接續法……これは字と字との關係より句讀を組立つる方法をいふ。句讀組立上の理法これなり。

第二、進行法……これは句讀と句讀との關係を論じて、節若くは段を組立つる方法をいふ。節段組立上の理法これあり。

第三、轉換法……これは節段と節段との關係を論じて、全篇を組立つる方法をいふ。全篇組立上の理法これあり。

第四、結束法……これは節段の終尾、若くは全篇の終尾にありて、思

想の關鎖をなす方法をいふ。全篇の終尾にあるを大結束といひ、節段の終尾にあるを小結束といふ。以上説く所の理論に基き、一の圖式を掲げて讀者の記憶に便せんとす。

接續法……(句讀の組立)

進行法……(節段の組立)

轉換法……(全篇の組立)

結束法……  
小結束……(節段の結束)  
大結束……(全篇の結束)

組立上の四大法

第二章 接續法

接續法とは文字を積み重ねて、句、若くは讀を組立つる方法をいふ。今句讀上の組立法を説かんとする前に、先づ句と讀との區別を説明することの必要を感じたり。

第一節 句讀の區別

句は一の成立したる思想を具へたるものにて、ある時は一の句にて一の節段とあることあり。又讀は句の中にありて、句を成立する一部の思想を有したるものにて、讀それ自身が獨立的に成立すること能はざるものあり。たゞ或る場合にのみ限り一の讀をもて一の句を成立せしむるものにて、獨立したるものあり。さればこの句と讀との區別は、文字の多少を標準とするにあらず。又思想の多少によるべきものにあらず。たゞこれ思想をば文字の上に帶はしてこれを組立つる

方法によりて互に相列るものありとす。故に前後の組立によりて同一の思想をば句とも讀ともおし得ることあり。又繁多ある文字にて讀とあることも、僅少ある文字にて句とあることも前後の組立如何によるべき者とす。組立とは讀の成立と句の組立とこれあり。

第一讀……(、)……文の上に施すべき讀點

讀の定義は前に説明したる通りあれども、その成立の上については

(一) 開

(二) 鋪

(三) 合

の三法の必要あることを知らざるべからず。

開とは思想の端緒を開きたるものをいひ、多くは原因、あるは主たる思想、若くはその名詞を表彰すべきものあり。鋪とはその端緒を承け

て之れを鋪陳するものをいひ、多くは例證、あるは形状等の思想を表彰すべきものなり。合とはその端緒、若くは鋪陳したるものを結ひて一とくへの纏りをつくるものをいひ、多くは結果、あるは斷定の思想を表彰すべきものあり。されば讀には、開とあるべきもの、鋪とあるべきもの、あるは合とあるべきものありと知るべし。

終に一言すべきことあり。そは世の學者は往往にして、副詞、若くは接續詞、例へば「寧ろ」「頗る」又は「そも」「また」等にて讀を切ることあり。これも文意の混亂せんことを避けて一の讀を切ることにしあれば可あるべしと思へど、余が上来説明したる讀と混同する恐れあれば、かゝる處には小讀として(、)の點を施すをよろしとす。

菊池入道討死の條

太平記

失 名 氏

故郷に留め置さし妻子どもは……開